学級経営ハンドブック

「夢」・「志」を育む学級づくり
（中学校編）

平成２５年３月

高知県教育委員会

はじめに

皆さんは、学級経営において学校教育目標や目指す学校像、子ども像、学年経営目標に基づいた学級経営目標を設定し、学級を育てるというマネジメントの視点をもって運営をしているでしょうか。

学校の教育活動の多くは学級を単位として展開されます。各学校では、学校教育目標を設定しており、それに基づき学年団が設定する学年経営目標があります。学級担任はそれらを意識して、目指す学級イメージを描いた設計図である学級経営案を立て、目指す学校像・子ども像を実現するために、生徒とともに一歩一歩営みを進めます。

学級担任は、目指す学校像・子ども像を実現するために不可欠なルールを生徒とともに設定し、生徒との信頼関係や、生徒同士の信頼関係を構築することを基盤として集団づくりを進め、そのプロセスを通して生徒の学習意欲や社会性を育むことを意識しなければなりません。

本県では、中学校で不登校や暴力行為等の生徒指導上のさまざまな問題が急激に増加する傾向があります。その背景には生徒の発達段階に起因する課題や、小学校と中学校のシステムの違いに、生徒が戸惑いを感じているという課題等があります。これらの課題を解決するためには、一人一人の学力の向上を保障する授業を行うことと併せて、生徒が安心して過ごすことができ、自分が大切にされていると感じられる居場所づくりや、自信をもって発言したり、物事に取り組んだりすることができる学級の環境づくりが不可欠です。

そこで、学級経営の基本的な考え方を示した学級経営ハンドブックを作成し、県内の中学校の教員を対象に、配布することとしました。このハンドブックを各学校において積極的に活用し、生徒とともによりよい学級づくりを目指してほしいと思います。

平成２５年３月

高知県教育長　中澤卓史

～も　く　じ～

ハンドブックの活用にあたって

基本編
（１）学級経営の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
（２）学校経営に基づいた学級経営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
（３）ＰＤＣＡサイクルに基づく学級経営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（４）学級経営案の作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
（５）学級の環境づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
ア　学級のルールづくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
イ　学級の人間関係づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
ウ　教室の整備と掲示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
エ　Ｑ－Ｕ※を活用したよりよい学級づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
（６）子どもや保護者との信頼関係づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
（７）学級経営と教育課程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
ア　学級経営と教科学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
イ　学級経営と道徳教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
ウ　学級経営と総合的な学習の時間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
エ　学級経営と特別活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
（８）学級経営と生徒指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
（９）学級経営とキャリア教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
（１０）学級経営と進路指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

※Ｑ－Ｕとは、「楽しい学校生活を送るためのアンケート」の略称です。

実践編（子ども）
（１）年間を通した学級づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
ア　通年の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
イ　学級経営の一年のスタート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
ウ　１学期の学級経営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
エ　夏季休業中における学級経営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
オ　２学期の学級経営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
カ　３学期の学級経営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
（２）学級における一日の生活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
ア　子どもに会うまでの準備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
イ　朝の会と帰りの会の考え方と生かし方・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２
ウ　昼食の時間の考え方と生かし方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
エ　掃除の時間の考え方と生かし方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
オ　休み時間と放課後の考え方と生かし方・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５

（３）問題等が発生した時の対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６
ア　トラブルが発生した時の対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６
イ　子どもが欠席した時の対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７

実践編（保護者）
（１）学級通信の工夫と留意点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
ア　保護者を意識した学級通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
イ　子ども同士の結び付け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
（２）保護者との関係づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
ア　保護者会と保護者面談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
イ　家庭訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４２
ウ　特別な支援が必要な子どもの保護者との関わり方・・・・・・・・・・・・４４
エ　子どもへの虐待が疑われる保護者との関わり方・・・・・・・・・・・・・４５
（３）保護者や地域からの苦情・意見への対応・・・・・・・・・・・・・・・・４６

中学校教員が知っておきたい小学校の特性と学級経営の傾向・・・・・・・・・・４７

実践事例編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８～６０

ハンドブックの活用にあたって

この学級経営ハンドブックでは、各学校における校長の学校経営ビジョンに基づき、組織として目指す学校像、子ども像を実現するための学級経営を進めるうえで必要なことについてまとめています。

構成は、「基本編」・「実践編（子ども）」・「実践編（保護者）」・「実践事例編」からなっています。

また、現場の教員の実践事例を提供してもらうとともに、アンケート調査に協力してもらい、今、学級経営においてどのようなことが課題となっているのか、学級経営を進めるうえでどのようなニーズがあるのかを把握しました。

調査の結果、全回答数に占める回答者の割合が高かったのは、以下のとおりです。

「学級・ホームルーム経営を行ううえで知りたいこと」（複数選択）

「児童生徒との信頼関係の築き方について」	【５１％】
「保護者との関わり方について」	【４９％】
「話合い活動・ロングホームルームの進め方について」	【４７％】
「望ましい学級環境づくりについて」	【４４％】
「学級・ホームルームの目標やルールの作り方について」	【４１％】

「学級・ホームルーム経営上の課題」（複数選択）

「個別の支援を要する児童生徒への対応」	【７５％】
「児童生徒同士のケンカやトラブル等が起こる」	【６８％】
「児童生徒が、担任の指示通りに行動しない」	【６７％】
「教室内で物（持ち物・掃除道具等）が隠されたり、壊されたりする」	【５７％】
「教室内に物（持ち物・掃除道具等）やゴミが落ちたままになっている」	【５２％】

※アンケートの実施時期：平成 24 年５月～８月
※アンケートの対象者　：採用２年・３年・10 年の教員・学級づくりリーダー養成研修会の対象となっている小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員（335 名）

この学級経営ハンドブックでは、教員のニーズをもとに各項目立てを行うとともに、以下のことに留意してまとめています。

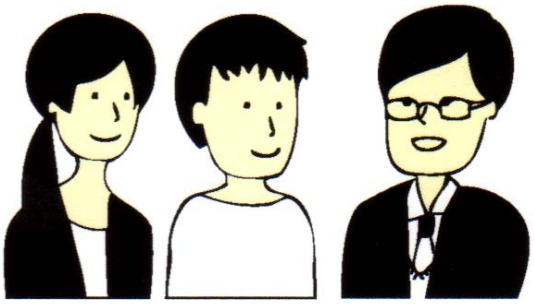
１　学級経営の基盤となる教員と子どもの信頼関係を築くことができるよう、関連する項目に「聴く」ことの大切さやそのためのポイントを紹介しています。

２　学級経営を通して、一人一人の子どもに自己存在感を与えるとともに、共感的な人間関係を育成するためのポイントや、子どもが自己決定する場を与えることができるポイントを紹介しています。

３　一人一人が大切にされる温かい学級をつくるために、子ども同士の話合い活動を積極的に行ってもらいたいという思いを込め、特別活動における学級活動の紹介と併せて、関連する項目において話合い活動を進めるポイントを示しています。

４　各項目の中で、特別な支援が必要な子どもへの関わり方のポイントを紹介し、現場の教員のニーズに応えるようにしています。
（ポイントについては、「☆」で示しています。）

５　項目によっては、学級経営を進めるうえで、参考になると考えられる事柄を【留意点】や【トピック】として紹介しています。



基 本 編

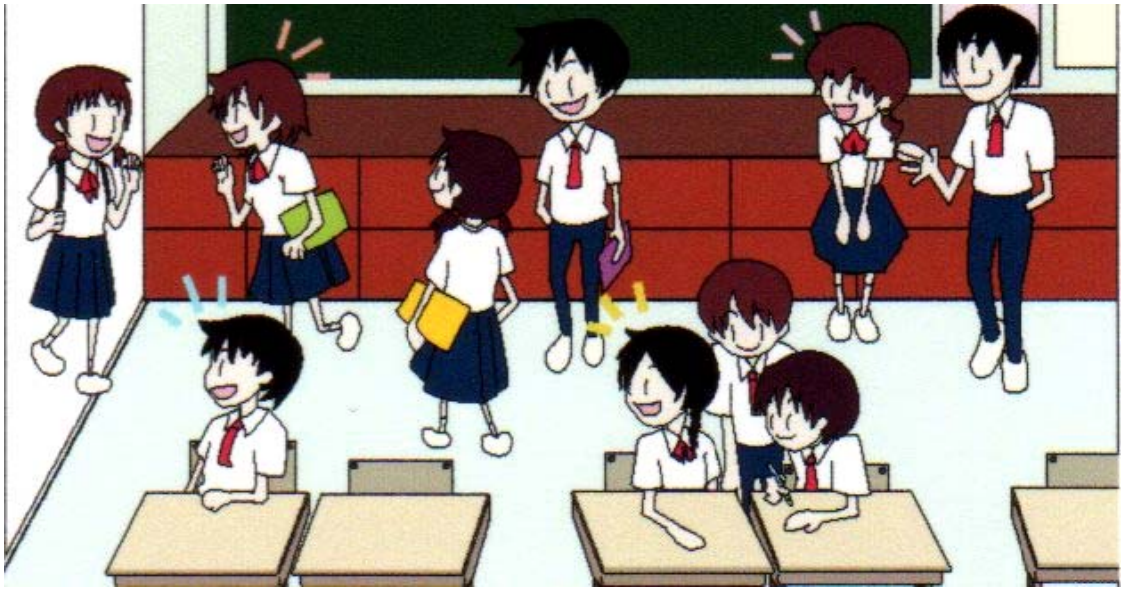
（１）学級経営の意義

子どもにとって自分が所属する学級は学校生活の基盤です。そのため、学級が子どもにとって、「安心できる場」、「自信をもって活動できる場」、「大切にされていると感じられる場」となる必要があります。

学校における子どもの成長や発達は、その多くが学級を基盤に展開されます。学級で展開されるさまざまな教育活動を、子ども一人一人の円滑かつ確実な成長や発達につなげ、人間形成の場とすることが重要です。そのためには、教員（学級担任）が子どもと一緒になって運営していくことが大切です。

学級経営においては、一人一人の人権が尊重される環境の中で集団づくりを目指すとともに、生徒指導の３機能（自己存在感を与える、共感的な人間関係を育成する、自己決定の場を与える）を位置付け、子どもがもっている力を引き出すための関わりを通して、その力を日常生活の中で生かしていく指導が求められています。それだけに、望ましい人間関係やよりよい生活を築こうとする態度を育成すること、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養うことができるよう、さまざまな活動や体験を通して子どもに働きかけていくことが大切です。

また、学級経営は、教職員の協働に基づく実践により、学習集団と生活集団の成長を目指す教育活動でもあることを理解しておく必要があります。



（２）学校経営に基づいた学級経営

学校経営は、学習指導要領の趣旨や市町村等の教育行政方針、家庭や地域の願い等に沿って校長が経営ビジョンを策定し、教職員とともに進められるべきものです。教職員は、経営ビジョンのもとで、「学校教育目標」や「目指す学校像・子ども像」に迫るための指導上の基本となることや留意点を共有し、学年の発達段階に応じた系統性のある「学年経営目標」を設定していきます。

そして、これらの目標を達成するために学級担任は「学級経営目標」を設定し、学級における実践の基本的事項を意識するとともに、学年団や教科担任と連携しながら学級経営を行います。その時、個々の教員の思いや願いが反映された学級経営が行われることはもちろん大事なことですが、そのことが強調され過ぎると、学校教育目標等との関連性が薄くなることがあるので留意しましょう。

また、学級担任が発信するメッセージが、学級間で異なることがないよう、「学校教育目標」との関連性を意識しながらベクトルを合わせた取組をすることが大切です。

学級担任は、学年主任や他学級の担任、各教科担当と連携するとともに、学年・教科・分掌・委員会といった縦横の組織を活用することが不可欠です。

また、副担任は学級担任と共通認識を図りながら学級経営に参画することが大切です。

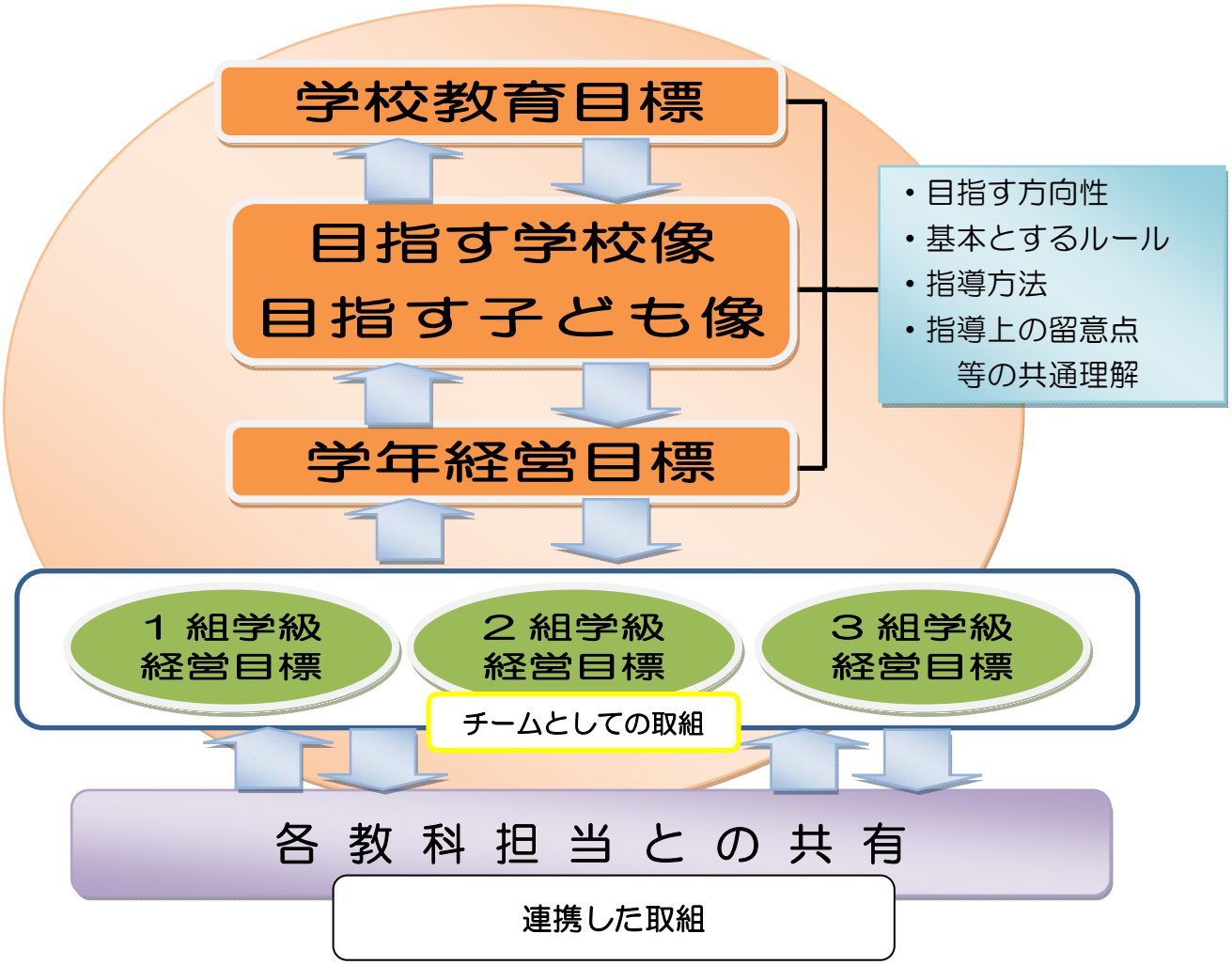


図１　学校教育目標と学級経営目標の関連のイメージ

（３）ＰＤＣＡサイクルに基づく学級経営

子どもにとって学級は、「学習集団」「生活集団」として大きな意義があります。学級担任は、学級経営目標の具現化への方法と実践の評価を行うとともに、成果と課題を把握し、よりよい学級経営を行うために改善を続けていく必要があります。

また、学級経営の充実を図っていくためには、「基本的生活習慣の定着」、「基礎学力の向上」、「生徒指導の充実」、「道徳性の育成」等を経営方針や指導の重点とし、より具体的な活動を計画していく必要があります。

学級経営の計画（Plan）

◎学級経営の明確なビジョンをもって、学級経営案を作成しましょう。

★学級経営目標に迫るため、各学期の目標を設定した意図的・計画的な取組

★共感的な人間関係のもとで、子どもに自己存在感を獲得させ、自己選択や自己決定ができる機会の意図的な提供

★子どもの特性、学校の実態、保護者の願い等を踏まえた、子どもの１年後の姿や卒業時、将来をイメージした取組

具体的な実践（Do）

◎学級経営案をもとに、個や集団に働きかけましょう。

★学級目標：生活のルール、一日の生活の仕方、一年間の見通し等の共有

★学級運営：学級活動における話合い活動、係活動、委員会活動、班編成の決定や班長の決め方、日直の役割の決定等の取組

★授業の学習形態：一斉指導・個別指導・グループ別指導・習熟度別指導等の取組

多面的な評価（Check）

◎「実践→診断・評価」に基づいて改善し、一歩一歩成果を積み重ね、学級を成長させましょう。

★具体的な実践後、結果等について診断・評価し、課題を早期に発見する取組

★複数の教員による子どもの行動観察や、子どもとの面接、Ｑ－Ｕ等の質問紙を活用した、アセスメントによる取組

具体的な改善策の検討（Action）

◎実践の成果と課題の要因はどこにあるのか、しっかりと評価し改善していきましょう。

★学級生活の改善のために、学級経営を見直す視点

- 子どもと教員、子ども同士の信頼関係の構築
- 生活面や学力面の支援
- 進路指導や悩み相談を含めたカウンセリング

図２　学級経営のＰＤＣＡサイクルのイメージ

（４）学級経営案の作成

学級担任は、学級の子どもをどのように導いていくのかについて明記した、学級経営案を作成する必要があります。学級経営を通してどのような集団や子どもを育てていくのかについて、目指す方向が定まっていれば、ＰＤＣＡサイクルを意識した効果的な学級経営が可能になります。

また、学級経営案を他の学級や学年の教員、保護者にも提示することで、学級担任の学級経営方針を理解してもらえ、日頃の協力が得られやすくなります。

◆学級経営案作成のポイント

□学校教育目標や校長の経営ビジョンを理解し、学校の重点課題や学年目標を踏まえて作成するようにしましょう。

□前年度の学級担任の学級経営目標や、指導の仕方等について引き継ぎを行い、理解しておくようにしましょう。

□指導する場面を記載する際は、具体的な場面や表現を意識しましょう。

□子どもの実態を把握するとともに、子どもの変容等を記録しておきましょう。また、それをもとにして次の実践における指導の手立てや見通しを考え、各学期の到達目標を決定するなど、学級経営案に修正を加えるようにしましょう。

□子どもの力を引き出す開発的な生徒指導や、Ｑ－Ｕ等を用いたアセスメントに基づき、問題発生等のリスクを未然に防止する予防的な視点を計画の中に位置付けておきましょう。

□学級経営案に基づいて実践する際には、生徒指導の３機能（自己存在感を与える、共感的な人間関係を育成する、自己決定の場を与える）を意識して進めましょう。

学級経営案（例）		
年　　組		
在籍者数：合計　　名		
学校の教育目標		
学年の経営目標		
目指す学級像		
学級経営目標		
目標	学習面	
	生活面	
	健康面	
教科等の年間計画（生徒指導の3機能を位置付ける）	生徒指導の年間計画（予防的視点を意識する）	
保護者との連携		

（５）学級の環境づくり

ア　学級のルールづくり

一人一人が学級の中で安心して生活したり、自信をもって生活したり、大切にされていると感じたりすることができるようにするために、ルールづくりは不可欠です。学級でのルールは、学校・学級生活における「望ましい集団活動」を通して、「よりよい人間関係」を形成していくうえでなくてはならない決まりです。その中には、学習規律や基本的なあいさつ（「おはよう」、「ありがとう」、「ごめんなさい」）、話す・聞く態度など「仲間と関わるうえでの最低限のマナー」も含まれています。

◆ルールづくりのポイント

□「人として許されないことは許さない」ということを、まず子どもに確認しましょう。そのうえで、学級のルールづくりをしましょう。

□学級生活におけるルール（人を大切にする言動をしよう等）、授業におけるルール（間違った答えを生かそう、異なる意見であっても考え方から学ぼう等）が定着するよう、５月までは朝の会や帰りの会等で子どもに伝え、常に確認して意識付けましょう。

□学級でのルールづくりを進める際は、学級担任の考えを一方的に押し付けるのではなく、なぜそのルールが必要なのかを子どもとともに話し合うようにしましょう。

□どんな学級であれば安心して過ごすことができるかについて、子どもが自由に意見を出せるように工夫しましょう。その際、特定の子どもの意見に片寄らないよう、ブレーンストーミングやグループ協議等の手法を活用しましょう。

□よくないこと・注意することなどを前もって伝え、後追い指導を減らす工夫をしましょう。
（ルールが守られている行動をどんどんほめていくことも大切です。）

□ルールは守るべきものであり守る価値があることを、学級担任の経験や、その時の気持ちを併せて伝え、子どもの規範意識を育むようにしましょう。

☆特別な支援が必要な子どもがいる場合は、その子どもに合った個別のルールが必要であることを、他の子どもが理解できるよう丁寧に説明しましょう。

☆子どもによっては、暗黙に了解されているものについても示した方がよい場合があります。文章化するなど、わかりやすく伝える工夫をしましょう。

【留意点】ルールが守られるようにするために必要なこと

ルールはつくって終わりではありません。つくったルールが守られているかを定期的に確認し、守られていなければ学級活動等で、守るためにどうするのかについて話し合うことが必要です。守られないルールが存在することは、子どもに「ルールは守らなくてもよいもの」というメッセージを送ることにもなりかねません。場合によってはルールをつくり直すことも必要です。

イ　学級の人間関係づくり

　人間は人と人との関係の中で育ち、社会性を獲得していきます。子どもにとって、学校生活のほとんどを過ごす学級での人間関係は、他者との信頼や協力、所属意識等に影響を与えるものです。
　学級が心休まる温かさを感じられる場になっている、自分の居場所があり所属意識をもてるものになっている、みんなから認められ自尊感情を育むものになっているなど、学級の人間関係の中に温もりのある関係性が存在していることが大切です。

◆子どもと教員との人間関係づくりのポイント

□子どもの話をしっかりと聴くことにより、子どもとの関係性を深めましょう。
□連絡帳や日記に、学級担任の感想や肯定的なコメントを丁寧に書きましょう。
□教員から適切に自己開示を行いましょう（学級担任の子どもの頃の話や失敗談等）。
□始業前や放課後、休み時間の子どもの様子を注意深く観察し、子ども同士の関係やグループ間の関係を把握しましょう。

◆子ども同士の人間関係づくりのポイント

□授業でペア学習やグループ学習、班学習等を導入して、仲間と協力して活動を行えるような課題を出しましょう。
□グループ活動を行う際は、人数を固定化せず２人組から４人組、４人組から８人組と、徐々に関わり合う集団の人数を増やすなど工夫しましょう。
□一人では運べない物の移動を頼むなど、協力して達成できる課題を意図的に与えましょう。
　（やってもらった後は、感謝の言葉をかけましょう。）
□休み時間等に、友達の「気になる様子」「頑張っている様子」を話題にしながら、みんなで認め合う雰囲気づくりを進めましょう。
□大きな成功につながる小さな成功を、みんなで喜び合う雰囲気づくりを進めましょう。
□話合い活動等を通して、みんなのために自分ができることを一人一人に意識させましょう。

【留意点】人間関係づくりのエクササイズを行う際に必要なこと
　人間関係づくりの方法として、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等の取組を学級活動の中で行う場合には、学級活動の指導の特質を踏まえて取り入れる必要があります。授業の最後は、振り返りだけで終わるのではなく、人間関係をつくるために、集団決定や自己決定を行うようにするなど、手立てを指導過程の中に効果的に組み入れることが必要です。

【トピック】リレーションのある関係づくり
　Ｑ－Ｕの結果で、プロット図が縦に伸びた状態や斜め型の学級では、リレーション※のある人間関係づくりが必要な状態です。子どもたちにとって安心・安全でみんなから認められる人間関係を形成することは、学級でのルールづくりとともに、よりよい学級を目指すためにも大切なことです。

※リレーションとは、「お互いに構えのない、ふれあいのある本音と本音の感情の交流がある」状態のことです。

ウ　教室の整備と掲示

教室がどのような環境であるかは、学びやすさや子どもの情緒の安定にも影響を与えます。誰もが安心でき、落ち着いて学習し生活することができるよう、教室の環境を整えることは学級経営において大切なことです。教室環境が整っていると、日々の学習や生活が落ち着き、居心地のよさを感じることにもつながります。きれいに整理整頓されている教室で過ごす子どもは、整理整頓の大切さを学ぶことができます。

教室には机や椅子をはじめとして、時には子どものケガにつながる物もあります。それだけに、日頃の教室環境の点検は、意識的に行う必要があります。

◆安心できる、落ち着きのある教室の環境づくりのポイント

※教室内の美化

□気持ちよく授業に入ることができるよう、黒板を常に美しく拭き上げるようにしましょう。

□机や椅子などに落書きをしたり、傷を付けたりする行為を見逃さず、物を大切に扱うよう指導しましょう。

□花を生ける、子どもの作品を大切に扱う、友達からの「温かいメッセージコーナー」を設けるなど、安心できる温かい雰囲気のある学級づくりの工夫をしましょう。

☆教室の棚や個人のロッカー等の整理整頓では、すべての子どもにわかりやすいように、置き場所や片付け方を写真や文字で明確に示す等の配慮をしましょう。

※掲示物

□掲示物はただ掲示するのではなく、どんなメッセージを伝えるのかを常に意識しましょう。

□整然と掲示されているか、掲示物がめくれていないか、画鋲が外れていないかなどに注意しましょう。

□警察や補導センター等が配布した万引き等の非行防止のポスターを教室に掲示するとともに、同年代の子どもの事件等が発生した時などに意図的に話題にし、許されない行為であることを意識させるようにしましょう。

☆掲示物については環境を整える役割がある一方で、刺激物になる場合があることに留意し、掲示場所等に注意しましょう。

☆黒板に集中しやすくするために、教室前面には必要最小限のものだけを掲示し、黒板周りをすっきりとさせましょう。

☆１時間の授業の流れを文字で示したり、時間が視覚化できるタイマーを使用したりするなど、見通しをもちやすくしましょう。

※視覚や音による刺激の調節

☆教室前面の棚にカーテンを付けるなど余分な視覚的な刺激をなくし、集中できるようにしましょう。

☆落ち着いた教室の環境づくりのために、椅子の脚に消音効果のある物（テニスボール等）を付けるなど、音による刺激を少なくしましょう。

エ　Ｑ－Ｕを活用したよりよい学級づくり

よりよい学級集団の育成には、二つのＲが必要であると言われています。

一つめのＲは、学級内のルール（Rule）です。集団活動・生活をする際のルール、対人関係のルールが全員に理解され、学級内に定着していることにより、学級内のトラブルが減少し、傷付けられることはないという安心感が生まれます。

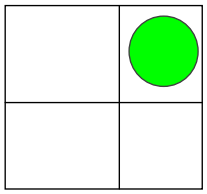
二つめのＲは、学級内の関係性につながるリレーション（Relation）です。互いに関係性ができていると感情交流ができ、子ども同士に仲間意識が生まれ、集団活動が活発になります。そのためには、授業において子ども相互の学び合いの場を意図的に設定し、関係性と学習意欲を高めることが必要です。

◇ 二つのＲを把握できるＱ－Ｕの見方

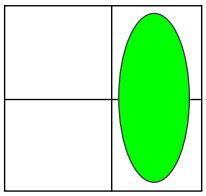
Ｑ－Ｕは、学校生活意欲尺度と、学級満足度尺度の二つの尺度で構成されています。

学級満足度尺度では、分布状況から学級のルールとリレーションの確立状況を知ることができます。分布が上寄りになるほどリレーションの確立度が高くなり、分布が右寄りになるほどルールの確立度が高くなることを意味します。以下に代表的な分布のパターンを示します。

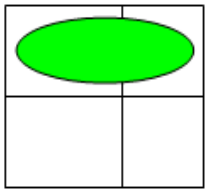
①ルールとリレーションが同時に確立している満足型学級集団



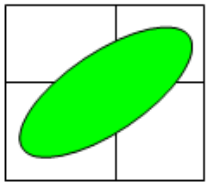
②リレーションの確立がやや低い堅さの見られる学級集団



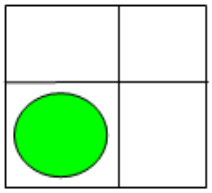
③ルールの確立がやや低いゆるみの見られる学級集団

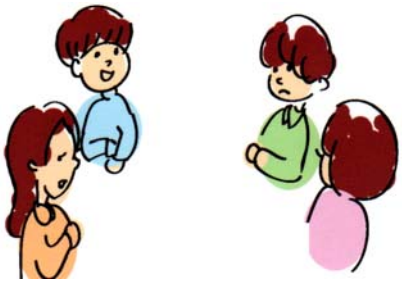


④ルールとリレーションの確立がともに低い荒れ始めの学級集団



⑤ルールとリレーションが喪失した崩壊状態の学級集団





参考　「Ｑ－Ｕ入門」　河村茂雄　図書文化
「温かい学級づくりのために」リーフレット　高知県心の教育センター

【トピック】「楽しい学校生活を送るためのアンケート　Ｑ－Ｕ」の活用

Ｑ－Ｕは、子どもの学校生活での満足度と意欲、学級集団の状態を調べる質問紙であり、教員の観察や面接で得た情報を客観的に補う資料として活用することができます。Ｑ－Ｕを実施することで、うえで述べた学級集団のルールやリレーションがどのような状態にあるかをつかむことができます。また、不登校やいじめの予防、学習意欲が低下している子どもの早期発見につなげることもできます。

（6）子どもや保護者との信頼関係づくり

教員が子どもや保護者と適切に関わることは、子どもや保護者とつながり信頼関係を築いていく源であり、よりよい学級経営の基盤となります。

教員が子どもへの適切な関わりができれば、子どもは教員をモデルとして他の人と適切に関わることができるようになるとともに、教員を信頼し、学ぶ意欲や自信をもつことができます。また、教員が保護者と共感をもって関わることによって、保護者に子育ての意欲や見通しをもってもらうことができます。子どもに学ぶ意欲や自信をもたせ、保護者の子育ての意欲を高めることができるよう、教員一人一人が関わる力を高めていきましょう。

◇　信頼関係の基本は「聴く」こと

教員が子どもとの信頼関係を築く第一歩は、子どもの話を丁寧に聴くことです。なぜなら、人は聴いてもらうことにより、他者が自分に関心を向けてくれている、大切な存在と意識してくれていると、感じるからです。

◆子どもと信頼関係を築くポイント

□子どもが話しかけてきた時には、子どもの方を向いて、しっかりと話を聴きましょう。
□子どもをあだ名で呼んだり、呼び捨てしたりせず、「さん」等で呼ぶようにしましょう。
□言葉にできない子どもの気持ちを想像しましょう。
□子どもが達成感を得られるよう、子どもが困っている時には声をかけて支援しましょう。
☆やって見せてから取り組ませたり、見通しをもたせて取り組ませるようにしましょう。
☆子ども一人一人の能力や特性の違いを認め、それぞれの成長を評価しましょう。

◆保護者と信頼関係を築くポイント

□会話の中から、保護者の真意や願いを想像しましょう。
□保護者が話している時には、うなずきながら聴きましょう。
□子育てにおける頑張りを認め、苦労に共感しましょう。
□学校の方針や取組を伝える際には、具体的に伝えましょう。
□子どもへの関わり方について提案する際には、子どものよさや成長を併せて伝えましょう。
☆支援が必要な子どもの保護者に対して、安易に他の機関や専門家を勧めることは、抵抗を感じている保護者を傷付けたり、学校不信を招いたりしかねないので、保護者の気持ちにより添いながらタイミングを考え、慎重に行いましょう。

◇　「ほめる」と「叱る」

「ほめる」「叱る」という行為は、相手の存在を認める、一人の人格として認めるという人間関係のうえに成り立つものであり、子どものもつ力を引き出したり伸ばしたりする行為につながります。学級の子どもの力を引き出したり伸ばしたりするためには、教員が適切なほめ方と叱り方をすることが求められます。また、教員のほめ方、叱り方が、学級の子どもの人間関係構築の

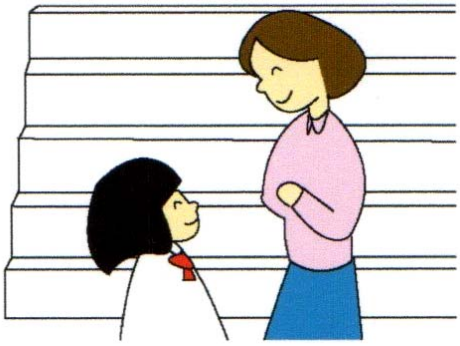
モデルになるということも意識する必要があります。

中学校の子どもは、身体や心の成長過程において不安定な時期にあり、小学校の子ども以上に他者を気にする傾向や、他者からほめられることを必ずしも快いこととして受け取ることができない子どももいます。一方、教員のほめる内容やほめ方によっては、ほめられた子どもが周りから疎まれ、いじめの対象となることもあるだけに、「ほめる」際には留意が必要です。

また、中学校の子どもの発達段階を考えた時、叱り方においても留意が必要です。望ましくない行為をしたからといって、正当性を振りかざし、頭ごなしに叱り付けたとしても教員の思いは子どもに伝わらず、逆に反抗されたり無視されたりします。場合によっては、そのことにより欠席がちになったり、大人に対して不信感をもったりすることにつながることもあります。

◆子どものほめ方のポイント

□具体的な行為・努力や頑張ったプロセス、子どもの伸びや変化をほめましょう。
□直接ほめたり、仲間に対してその子どもの頑張りを伝えたりしましょう。
□「うなずく」「ほほ笑む」等のジェスチャーや、アイコンタクト等を交えてほめましょう。
□当たり前の活動が、当たり前にできていることを肯定的に評価しましょう。
□他の人と比較してほめるのではなく、子どもの成長したところをほめましょう。
□他の人が言った肯定的な評価を引き合いに出して、重ねてほめるようにしましょう。
（「〇〇先生も、あなたが手伝ってくれて嬉しかったと言っていたよ。」などと伝えることで、子どもは複数の人からほめられていることを感じることができます。）
□子どもの行為に対して、感謝の気持ちを込めてほめましょう。
□学校全体や多くの子どもを褒める場合は、面前でほめることが効果的ですが、特定の子どもをほめる場合は、ほめる内容によっては面前ではなく、個別にほめることが望ましい場合があるので留意しましょう。
□大半の子どもが当たり前のようにできることを面前でほめることは、他の子どもに「その程度のことしかできない存在」という、隠れたメッセージを送ることにもなりかねないので留意しましょう。
☆特別な支援が必要な子どもの得意なことや強みを見付け、認めることを通して伸ばすようにしましょう。



◆子どもの叱り方のポイント

□叱る時は、子どもが望ましくない言動を、なぜ行ったかについて理由を聴くことを意識しましょう。

□望ましくない言動があった時には、その言動について指摘し、どうすればよいのかを考えさせるようにしましょう。

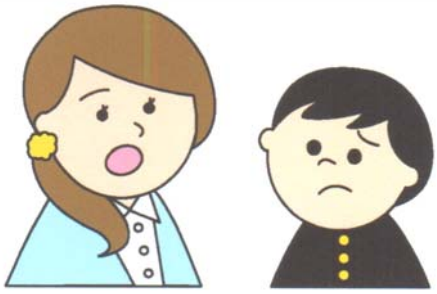
□権威を振りかざすのではなく、子どもの気付きを促すようにしましょう。
（トイレのスリッパが散らばっている時などは、「散らかったままだ。何やっているんだ！」ではなく、「次の人が履きやすいようにするには、どうしたらいいかな？」などと声をかける。）

□「だからあなたはだめだ」「前にもあなたはできていなかった」など、子どもの人格を否定するような叱り方や、過去を引き合いに出して叱るのは避けましょう。

□他人の人格や身体を傷付けるような行為に対しては、絶対に許さないという姿勢で叱りましょう。小さな過ちに対しては、正しい行動を促すようにしましょう。

□学級の仲間の前で個人を叱ることは、周りの子どもに「ダメな子、できない子」という隠れたメッセージを送ることになりかねないので留意しましょう。

☆抽象的な問いかけでは考えにくいという子どもには、具体例を提示して選択させたり、一緒に考えたり、具体物を提示したりしましょう。



【トピック】「叱る」と体罰

「叱る」という行為は、子どもの不適切な言動の誤りに気付かせ、よい方向へと導くための行為であり、そこには子どもの成長を促進する作用があります。

一方、体罰は子どもの心身に対する侵害（殴る・蹴る・罵声を浴びせる等）や肉体的苦痛を与える行為（正座・直立等、特定の姿勢を長時間保持させる等）であり、恐怖や苦痛を利用して子どもをコントロールしようとする、あってはならない行為です。

体罰を許さない環境づくりを進める必要がありますが、そのためにも以下の点についてチェックしてみましょう。

〇保護者からの「厳しく指導してほしい」という言葉をそのまま受け取っていませんか。
〇信頼関係があれば手を出しても、それは「愛の鞭」だから大丈夫と考えていませんか。
〇部活動において、「強くするためには、手荒なことをしても子どもに緊張感をもたせることが大切だ」といった、指導者の経験知に基づく旧態依然とした指導を行っていませんか。
〇厳しい指導をしないと子どもに「なめられる」いう思い込みはありませんか。
〇指導に従わない子どもに対して、従えない理由を聴こうとする姿勢がありますか。
〇力に頼らない指導方法について、研究や勉強を主体的に行っていますか。

（7）学級経営と教育課程

ア　学級経営と教科学習

教科学習は、単に教科に関する理解を深める時間だけではなく、社会性や人間関係を育む時間でもあることから、子どもと教員、子ども同士の人間的な触れ合いも大切にする必要があります。そして、学習活動におけるルールの遵守や互いの理解・協力等を通して、集団を育てていくことが求められます。

教科学習の時間においては、聞き合い伝え合う活動を通じて、自他の違いを認め、互いの信頼関係や協力、役割の遂行や学級の一員としての責任等の力を獲得できる場面を設定することが必要です。そうすることで、安心感のある学級づくりや、誰にも排除されない学級づくり、個性の伸長や自尊感情の育成、信頼関係の醸成につなげることができます。

中学校では教科担任制であることから、学級担任は学年主任とともに、学習規律や授業展開における留意点、学級目標、ルール等について各教科担任としっかりと共有し、教科担当により対応が異なることがないようにしておく必要があります。

◆展開するうえで教員が意識したいポイント

□子どもがわからないことをわからないと言え、間違いや失敗があっても意見が尊重される支持的風土をつくりましょう。

□発問に対する子どもの回答が、求めているものと異なるものであっても、すぐに他の子どもに「他には？」と回答を求めるのではなく、発言した子どもの考え方を聴き、肯定的に評価するようにしましょう。

□子ども一人一人の言葉に耳を傾け、出された意見や活動に対し適切な評価（承認、賞賛、励まし等）をしましょう。

□子どもの意見を授業の展開に反映させることや、子ども同士が意見を述べ合うなど、多様な意見が大切にされる相互交流のある授業を展開しましょう。

□すべての授業において学習の目的や意味、授業のねらいなどを明確に示し、子どもと共有しましょう。

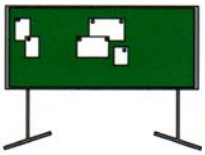
□ペア学習やグループ学習、話合い活動等を取り入れ、一人一人を大切にした指導方法を工夫しましょう。

□学習活動の中に協力し合う活動や信頼関係を築く場面設定をしましょう。

□意見を出し合い、共感したり違いを理解したりして、互いのよさを認め合える場面設定をしましょう。

☆特別な支援が必要な子どもに対しては、子どもの学び方や特性を把握し、子どもが混乱しないよう具体物を示したり理解の度合いを確認したりするなど、学び方や特性に応じた指導と評価をしましょう。

参考　「人権が尊重された学校づくりのためのチェックリスト（学習指導）」をもとに作成
http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310801/gakkodukurityekkurisuto.html



イ　学級経営と道徳教育

道徳教育は、すべての教育活動を通して展開するものであり、「人との関わり」について考える機会でもあることから、学習指導要領〈道徳〉における道徳性を育むための内容項目と、学級経営をつなげて実践していくことが求められます。基本的な生活習慣や善悪の判断、決まりを守る等の規範意識を育てる指導や、日常生活や学習の基盤となる道徳性の指導と併せて、具体的な出来事を題材にして感性に働きかける指導を促進することが大切です。そのためにも多様な体験及び体験活動を生かし、自分と他者との人間関係や社会との関わりに目を向けさせ、自己の役割や責任を認識し、思いやりや自律、協調性を育むことと関連させて、夢や希望、志をもって生きることができるよう指導していくことが必要です。

学級経営において、日々の基本的な生活習慣や善悪の判断、決まりを守る等の規範意識を育てることは、学級生活を充実させ、一人一人の子どもの道徳性を育むことにもつながるため、道徳教育と学級経営の関連性をしっかりと意識して進めることが大切です。

◆道徳教育を展開するうえでのポイント

□自分自身の思いや願いを出し合い、共感したり、自分とは異なる考えに接したりする中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感したり他者を認めたりすることができる場面を設定しましょう。

□さまざまな問題の根底にある他者への共感や思いやり、法律や決まりのもつ意味等について考えを深めることができるように、道徳の時間や体験活動を通して、思いやりや役割意識、規範意識等の道徳性を育む場面を設定しましょう。

□子どもが興味を示し、感動を覚えるような魅力的な教材の開発や、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験等の体験活動を生かした指導を行いましょう。

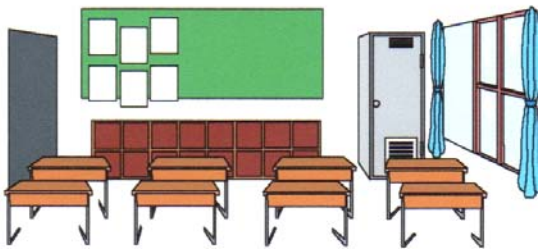
□道徳の時間で考えたことを、一人一人が日々の生活の中で実践することができるよう、朝の会を活用して子どもに意識付けたり、実践している子どもがいればその場で価値付けの評価をしたりして、道徳的価値の自覚ができるようにしましょう。

□校長の方針のもと、教員が協力して道徳教育を展開するため、「道徳教育推進教師」を中心として組織的に進めましょう。

□社会や学級の日常生活上の課題を、道徳の時間の学習内容と関連させ、子どもがよりよい学級生活について考えることができるようにしましょう。

□学校や地域での日々の生活の中で、思いやりや協調性等が表れている行動を掘り起こし、認めることを通して、子どもの規範意識を育てるようにしましょう。

□道徳の時間を通して、子どもと教員、子ども同士の適切な話し方について考え、相互理解や信頼関係を築きましょう。



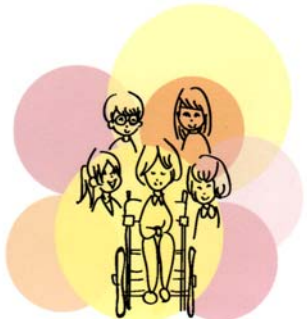
ウ　学級経営と総合的な学習の時間

総合的な学習の時間において、子どもは探究的な学習や体験的な活動により日常生活や社会に目を向け、課題を発見します。

また、課題解決を目指して多様な考えをもつ仲間と関わることにより、学級の友達のよさや、自分との考え方の違い、協力することの大切さなど、学級の中に定着させたい要素を育てていくこともできる時間ともなります。

総合的な学習の時間における学びは、子ども同士の信頼関係や協力し合う姿勢の育成、課題解決力の獲得などにつながり、よりよい学級づくりを進めるうえで有効であることから、日頃の学級経営の中で子どもに身に付けさせたい力と関連付けて、課題解決を目指す班活動やグループ活動を展開していくことが求められます。

◆総合的な学習の時間を展開するうえでのポイント



□多様な個性をもった友達の考え方や、意見の違いを理解し、尊重し合えるような展開をしましょう。

□学習活動を通じて自他の考え方や、思考の違い等を理解する場面を設定しましょう。

□子どもが課題を解決していく活動の中で、他者への信頼感や協力することの大切さ等を理解する場面を設定し、肯定的な評価を通して共感的な関係を築けるようにしましょう。

□学習活動を通じて多様な生き方を学ばせ、自分のこれまでの生き方やこれからの生き方を見つめ、考えを深めることができる展開を意識しましょう。

□フィールドワークをもとにした探究的な学習を通して、子どもが自分の地域のよさに気付き、地域への誇りと愛着を育むことができるようなテーマ設定をしましょう。

□地域の人々との交流を通して、子どもの社会への参画意識を高めることができるような内容となるようにしましょう。

□子どもの主体性が発揮されている場面では、子どもが自ら変容していく姿を見守りましょう。子どもの取組が停滞したり迷ったりしている場面では、子どもを援助する適切な働きかけを行いましょう。

□すぐに答えの出ないような、困難な問題の解決に向けた連続的な学習の過程が繰り返される場合に、子どもの自発的・能動的な取組を重視するだけでは、学習の広がりや深まりは期待できません。子どもの学習を動機付けたり、方向付けたり、支えたりするための教材を用意し、子ども自身の力で解決できるよう支援しましょう。

□問題解決や探究活動において、物事の本質を見極めようとする子どもの姿が見られるよう、子どもに積極的に寄り添い、子どもの学習を支えるとともに、主体性が発揮できるように、学習状況に応じた適切な支援を行いましょう。

□子どもが情報を活用し、力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶことができるよう、展開を工夫しましょう。

エ　学級経営と特別活動

中学校における特別活動は、学習指導要領〈特別活動〉において、学級活動・生徒会活動・学校行事の３つが位置付けられ、望ましい集団活動を通して、よりよい人間関係を築こうとする態度を育てるとともに、人間としての生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養うことを目標としている教育活動です。特別活動を通して学級の仲間と協力し、よりよい学校生活や望ましい人間関係を築くことは、学級経営の大切な要素です。

特に、学級活動は、学級の諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる活動です。そのため、子どもが、集団の一員として互いに協力し、信頼し合える人間関係を形成することや、楽しく豊かなよりよい学級・学校づくりに参画すること、また、学級や学年の集団生活における課題解決に、自主的に取り組もうとする態度を育成することを目指して行う必要があります。

中学校においては、子どもが思春期の中で揺れ動くという成長過程での課題もありますが、小学校よりも生徒指導上の問題が多く発生する傾向があるため、学級活動を充実させ子どもの成長を促すとともに、場面に応じた適切な言動をとることができるよう指導していくことが求められます。

学級活動の趣旨を踏まえた実践は、よりよい学級づくりにつながります。学級経営を進めるうえで、学級活動の時間をどのように活用するのかについて留意することが必要です。

◆学級活動を展開するうえでのポイント

□誰もが大切にされ、活躍できる場面の設定や、思いやりのある温かい人間関係を構築する学級づくりを、話合い活動を通して進めましょう。

□子どもが話合いを通して、よりよい学級や学校生活の創造に取り組むことができるよう、他の人の意見を尊重する話合いのルールを定め、よりよい学級づくりに向けた話合いができるようにしましょう（ｐ２４参照）。

□子どもが自らの生活の中から課題を見付け、どのようにすればその課題を解決できるのかについて、考えることができるようにしましょう。

□自分たちでルールをつくって守る活動や、ルールを振り返る機会を設けるなど、自治力を高める学級活動を行い、規範意識や責任感を醸成しましょう。

□日頃から互いの思いや願いを出し合い、学校生活を高める等の自主的な活動を行うことができるよう、学級活動を計画的、系統的に展開しましょう。

□子どもがよりよい人間関係を構築し、自己実現の喜びや学級の大切な一員であるという気持ちをもつことができるよう、学年団等で具体的な取組について話し合い、創意工夫を進めましょう。

□子どもの問題行動の現状から、小学校と中学校、中学校と高等学校といった異校種間での連絡会や指導方法の検討など、段階的な接続時の適応に関する指導を充実させましょう。

□学級活動は、生徒指導において子どもに身に付けさせたいと考えている「自己指導能力」の育成を目指して行う中心的な時間となります。ほめたり励ましたりするなど、子どもの力を引き出す生徒指導の視点をもって展開するようにしましょう。

☆子どもが少ない学級では、他の学級や学校と合同で実施するなど、集団の中で活発な活動ができるよう工夫をしましょう。

◆生徒会活動を進めるうえでのポイント

□生徒会活動では、子どもとの対話を通して、自分たちも学校をつくる集団の一員であることを自覚させ、年齢の異なる仲間と協力して、よりよい学校をつくることができるよう働きかけましょう。

□子どもの主体性を育てるために、子どもに一定の権限をもたせ、責任を果たすことを通して、自律的な活動ができるよう留意するとともに、子どもが達成感や自信を獲得できるように支援しましょう。

□子どもが、学校生活上の諸問題を自ら積極的に見出し、自主的に解決できるようにするために、一人一人の思いや願いを生かした望ましい集団活動の方法や、実践的な態度を身に付けられるよう工夫しましょう。

□解決に向けた取組を学級や学年、全校生徒で行うことを通して、既存のルールの大切さやルールを守ることの責任・規範意識を学ぶ場面を意図的に設定しましょう。また、よりよい学校生活を営んでいくための新しいルールの設定等に取り組んだり、集団としての連帯感を高め、集団（社会）の一員としての望ましい態度や、行動の在り方を見直したりする場面を設定しましょう。

□生徒会の計画に基づき、学級や学年の枠を超えて組織される異年齢集団による交流、学校行事への協力、ボランティア活動など、子どもが主体性、自立性をもった活動の充実を積極的に支援しましょう。

◆学校行事を進めるうえでのポイント

□入学式や卒業式、始業式や終業式等は、子どもの学校への所属意識を高めるとともに、夢や高い目標をもたせ、集団における規律ある態度を育てる場であることを意識させるとともに、公共の精神を養う場として意図的に展開しましょう。

□体育大会や文化祭、スポーツ大会等では、学級としての連帯感を強め、よりよい学校・学級生活を仲間とともに築こうとする、自主的な態度や行動力を養うことができるよう、支援していきましょう。

□学校行事を通じ、個性の伸長や社会性の向上、主体的な態度の育成を図り、人間としての生き方について自覚が深められるよう、学校行事のねらいを子どもに意識させましょう。

□学校行事での体験活動で気付いたことなどを発表し合うことを通して振り返り、達成感等を味わうことができるよう工夫しましょう。

☆教科学習でつまずきがちな子どもや、配慮を要する子どもに対しても、自分の得意とする能力を生かすことができるよう、役割を分担させるなどの配慮をしましょう。

（８）学級経営と生徒指導

生徒指導は、すべての教育活動において貫かれる大切な視点であり、「自己存在感を与える」、「共感的な人間関係を育成する」、「自己決定の場を与える」という生徒指導の３機能を通じて自己指導能力※を育むことを目指しています。そのためには、学級経営や学習活動の場面に生徒指導の３機能を位置付け、子どものもっている力やよさを引き出そうとする関わりを通して、自己指導能力を高めることが求められます。

学級経営における生徒指導は、自己指導能力の育成に向けた子どもの生活習慣の確立がベースになります。生活習慣の確立のために、子どもの発達段階を踏まえ健康維持・ルール遵守・規則正しい生活・礼儀作法などを身に付けさせることが必要です。

また、学級担任は、日頃から子どもの表情や言動などに気を配り、問題行動の前兆がないかをつかむため、アンテナを高くすることが大切です。そして、気になる子どもがいれば、個別面談を行う等の対応を行うことにより、いじめや暴力行為、非行などを予防し、健全育成につなげることが必要です。

※自己指導能力とは、その時、その場でどのような言動が適切であるか自分で考え、判断して実行することができる能力のことです。

◆生徒指導を進めるうえでのポイント

□学級には多様な子どもがいることを前提に、多角的に子ども理解をするよう意識しましょう。
〈子ども理解の対象〉　・能力の問題（身体的な能力、知的な能力、学力など）　・性格的な特徴
・興味、関心、要求、悩み　・交友関係　・家庭環境、成育歴など

□表情や言動、持ち物、服装などきめ細かい観察を日頃から行い、記録するとともに必要に応じて面接を行いましょう。

□子どもが自他の個性を尊重し、相手の立場になって考え、相手のよさを見付けようとする集団づくりを進めるために、教員がその手本を示すようにしましょう。

□行事や係活動、生徒会活動等を通して、やるべきことを明確にし、互いに協力し合える集団づくりに努めましょう。

□Ｑ－Ｕ等のアセスメントツールを活用して、客観的かつ総合的に子どもを理解しましょう。

□日常の学校生活における子どもの不安や悩み、訴えをしっかり聴き、受け止めるようにしましょう。子どもの不安や悩み、訴えを、学級担任が一人で抱え込むのではなく、学年主任や管理職にも相談して対応しましょう。

□教育相談の機会を適宜設け、子どもの不安や保護者の訴えに向き合うようにしましょう。

□深刻な相談で、専門的な援助を求めなければならない場合は、管理職に相談してスクールカウンセラーや外部の専門家との連携を図りましょう。

□学校全体の基本方針やルールに基づき、「社会で許されない行為は、学校でも許されない」ことを日々徹底しましょう。

□許されない行為をした子どもに対しては、それを許さないという毅然とした姿勢で向き合う必要がありますが、「叱る」だけではなく、子どもが許されない行為をした背景には、どんな要因があるのかを知ろうとする姿勢を常にもつようにしましょう。

◆いじめの予防と対応のポイント

□いじめは、いつでもどこでも起こりうるものとの認識をもち、学級の状況を積極的に認知し、発見した際は、早期解消に向けて取り組みましょう。その際、「いじめられる側にも問題がある」という見方はしないようにしましょう。

□アンケート等を有効に活用し、子どもの心の状態を意識的に把握しましょう。

□役割演技（ロールプレイ）等により、互いのことを理解し合う活動を、学級活動の中で設定するように工夫しましょう。

□道徳の時間や学級活動等を通して、子どもに人権尊重の意識を浸透させ、「いじめは人間として絶対に許されない行為である」ことを理解させましょう。

□「いじめ」か、「いじめではない」かで、子どもや保護者と学校がトラブルになることがあります。指導する場面では、安易に「いじめ」という言葉を使わず、子どもの辛い思いや具体的な言動に焦点を当て、改善を図ることを目的として指導していきましょう。

□いじめの背景や実態を十分把握できていない段階や、いじめられている子どもの心の回復が見られない状態で、いじめている子どもといじめられている子どもを、仲直りをさせて終わりにすることは、いじめを見えにくくするとともに、いじめを受けている子どもの教員不信につながりかねないので留意しましょう。

※いじめの予防と対応の詳細については、「子どもたちの笑顔のために」（高知県教育委員会）をご覧ください。　http://www.pref.kochi.lg.jp/uploaded/attachment/21679.pdf

◆非行や問題行動への対応のポイント

□日頃から道徳の時間や学級活動などを通して、規則やルールを守ることの大切さや価値について理解させることで、規範意識を育んでいきましょう。

□非行や問題行動が発生した際は、生徒指導主事や学年主任、管理職などと連携して対応するようにしましょう。

□万引きなどの問題行動に至った理由や背景をしっかり聴き、そのうえで、その行為の意味やそれがもたらす結果や責任などを理解させる指導と併せて、子どもの心を育てる指導を行いましょう。

□法に触れる行為をした子どもの保護者に対しては、その事実を伝えることと併せて、子どものよさや頑張りを伝え、今後の対応について学校がやっていくことを説明するとともに、家庭でやることを確認し、協力して子どもを立ち直らせるようにしましょう。

□非行や問題行動により、児童自立支援施設等に送致された子どもに対しては、「心のケア」や人間関係を深めることを目的として、手紙を送ったり、面会に行ったりすることで、「学級の一員である」ということを意識付けるようにしましょう。学級通信を送ることも考えてみましょう。

【トピック】高知県の少年非行の現状

高知県の「刑法犯に占める少年の割合」は、４年連続全国ワースト１位、「１０００人当たりの少年非行率」は３年連続全国ワースト１位という深刻な状況にあります（平成２３年末の結果）。非行や問題行動は、どこの学校でも起こりうることであり、日頃から予防的な取組を進めることや子どもの観察が不可欠です。

また、警察や補導センターなどと、日頃から相談活動等に基づいた連携をすることが大切です。

（９）学級経営とキャリア教育

キャリア教育において大切なことは、学級・学校・家庭・地域社会等におけるさまざまな活動を通して、将来設計の基盤となる「夢」や「志」を育み、目標の達成を目指して工夫し努力することの大切さを体得させ、自信や自己有用感を高める機会を計画的に設けていくことです。

中学校では、各教員がキャリア教育においてさまざまな役割を担っています。中でも学級担任は、道徳の時間、総合的な学習の時間、学級活動及び担当する教科において、直接的な指導者として、キャリア教育に関わる授業を進めていくことになります。キャリア教育の実践にあたっては、学校におけるキャリア教育の目標と身に付けさせたい能力（基礎的・汎用的能力）を踏まえて、すべての教育活動の中で意図的・継続的に行われることが不可欠です。

キャリア教育を断片的な取組に留まらせないためにも、学級経営を基盤として、子どもたちの実態や発達段階に応じたキャリア教育を推進していくことが大切です。学級経営を通して、自己理解や他者理解を促進すること、子どもに係活動や当番などの役割を位置付け責任をもたせること、日々の学習を自分が立てた計画に基づき進めていくことなどは、キャリア教育で求められている力を育むことにつながります。

◆キャリア教育を推進するためのポイント

□自校におけるこれまでの進路指導の実践をキャリア教育の視点で捉え直しましょう。
□職場体験活動は、職業や仕事を切り口としながら、自分の生き方について考えさせるようにしましょう。
□教育活動全体における体験活動と、身に付けさせたい能力の位置付けを明確にしましょう。
□事前・事後指導を工夫し、各教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動とのつながりをもたせましょう。
□キャリア教育を進める際には、高知のキャリア教育の３本柱の「学力向上」、「基本的生活習慣の確立」、「社会性の育成」を意識しましょう。

◇　第１学年の取組の基本的な考え方

ガイダンス機能を十分に働かせながら、「中１ギャップ」等の問題を解決し、小学校から中学校への円滑な適応を図っていくことが求められます。また、他者との関わりの中で自己を理解し、他者の個性を尊重し、よりよい人間関係を築いていこうとする能力や態度を育てていくことが重要です。さらに、職業調べや職場訪問などの活動を通して、社会のさまざまな職業についての視野を広め、将来に対する夢やあこがれを抱いて、その実現に向けて努力する態度を育てていくことが大切です。

①　自分のよさや個性が分かるために

中学校生活のガイダンスや諸検査、学級活動等を通して、中学校生活に適応できる環境や自分自身のよさを知る機会をつくることに留意しましょう。

② 自己と他者の違いに気付き、尊重しようとするために

各教科等の学習を中心として、自分の考えを適切に伝えることができる能力を身に付けさせるとともに、相手の考えを受け止める態度を養うことに留意しましょう。

③ 集団の一員としての役割を理解し、果たそうとするために

学級や委員会、生徒会等の諸活動を通して、自主性を高めることに留意しましょう。

④ 将来に対する夢やあこがれを抱くために

職業調べや職場訪問等の活動を通して、将来の生き方に興味をもたせることに留意しましょう。

◇ 第２学年の取組の基本的な考え方

中堅学年としての学校生活における立場や役割を自覚させ、新たな希望や抱負をもって、有意義な学校生活を送ることができるようにすることが大切です。そのためには、自分の個性や能力を生かしながら、充実した学校生活を自分でデザインし、何事にも意欲的に取り組もうという心構えをもたせるとともに、職場体験活動等に参加する機会を捉えて、社会と自分とのつながりについても考えさせる必要があります。

① 自分の言動が、他者に及ぼす影響について理解するために

さまざまな人と関わりながら、よりよい生活や学習、進路、生き方等を目指すことの大切さを理解させることに留意しましょう。

② 社会の一員としての自覚を芽生えさせるために

社会や大人を客観的に捉えるために職場体験活動やボランティア活動等から、勤労の意義や働く人々の思いを理解させるように留意しましょう。

③ 将来の夢を達成するうえでの現実の問題に直面し、模索するために

キャリアカウンセリング※等を通して、自分の適性を知り、諸活動に生かしていくことができるよう、働きかけることに留意しましょう。

※学校におけるキャリアカウンセリングは、子ども一人一人の生き方や進路、教科、科目等の選択に関する悩みや違い等を受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、子どもが自らの意思と責任で進路を選択することができるようにするための、個別または、グループ別に行う指導援助のことを言います。

◇　第３学年の取組の基本的な考え方

最上級生であるという自覚のもと、希望と抱負をもって中学校生活の最終学年を送っていこうとする心構えのもと、現実を見つめ、自らの課題に主体的に取り組ませ、解決させることが大切です。

①　自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進めるために

進路選択に備え、係・委員会活動や職場体験等で得たことを、自らの学習や生活に生かすことができるように留意しましょう。

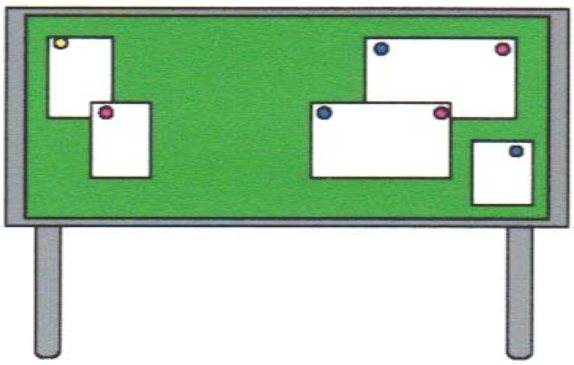
②　社会の一員としての義務と責任を理解するために

体験活動を通し、社会におけるさまざまな役割を理解するとともに、社会と自己の関わりから自分の特徴に気付き、自分らしい生き方について考えられるよう留意しましょう。

③　将来設計を達成するための困難を理解し、それを克服する努力に向かうために

さまざまな人からの意見等を参考に、自ら進路計画を立て、目標の実現に向かい努力を続けることの大切さを伝えるよう留意しましょう。

※キャリア教育の詳細については、「中学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉」（文部科学省）、「高知のキャリア教育」（高知県教育委員会）をご覧ください。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1306815.htm
http://www.pref.kochi.lg.jp/uploaded/life/69349_215500_misc.pdf



（１０）学級経営と進路指導

進路指導は、卒業後の子どもの進学や就職に関して、教員が指導や助言を行う教育活動です。進路指導では、子どもが将来設計を立てることができるように支援したり、指導を通して生き方について考えたりすることで、子どもが自己実現に向けて進もうとする力を、自ら引き出せるようにすることを目指しています。

子どもが自己実現に向かって、進路を考え決定していくことができる力を付けるためには、子どもの自己理解を進めるとともに、適切な進路指導が必要となります。そのためには、１年生からの計画的・継続的な指導・援助を行うことができるよう、学校としての進路指導計画が必要であり、各学年において身に付けさせたい力を明確化することが求められます。

各学級担任は、普段から子ども理解に努めるとともに、必要な資料を収集することを通して、子ども一人一人の能力や適性、興味・関心などを十分理解する必要があります。子ども理解は、学級経営を行ううえで不可欠なものであると同時に、進路指導においても基盤となるものであることをしっかりと認識しましょう。

◆進路指導を効果的に進めるためのポイント

□学級活動や、道徳教育の充実を図ることを通して、子どもが自分の適性を理解し、興味・関心を感じられるようにするとともに、自己有用感を育むことができるよう、自己選択や自己決定の場を与えましょう。

□卒業後の進路を早期から意識することができるよう、１年次より体験的な学習を取り入れ、多様な職業と出合わせることを意識しましょう。

□体験的な学習を実施する際には、事前学習において体験の意義やねらいをしっかり理解させるとともに、事後学習において、ねらいがどれだけ達成できたか、自分の気付きや変容をどれだけ感じることができたかなど、価値付けを確実に行いましょう。

□中学校卒業後の進路についての意識を高めるために、１年生の段階から職業に関する情報や高校紹介、模擬試験等の案内を掲示して意識付けるようにしましょう。

□教室に「進路コーナー」等のスペースを設け、子どもが自由に進路に関する情報を得ることができるようにしましょう。

□定期的に進路指導を行う場面を設定し、子どもの進路に対する意識を育てましょう。その際、子どもの自己理解を促すアンケートの活用は効果があるので考えてみましょう。

□日々の生活の中で、子どものよさや頑張りを認め、励ましの言葉を贈ることを通して、子どもがもつ可能性や意欲を引き出し、夢や志をもたせるように働きかけましょう。

【留意点】進路相談の有効活用

子どもの不安や悩みを知ることができる進路相談は、学級における進路指導を補完する役割をもっています。進路相談を通して、子どもの進路選択と、その実現に向けた課題解決を支援することにより、子どもとの信頼関係を築くとともに、自己指導能力の発達も促しましょう。

実 践 編
（子ども）

（１）年間を通した学級づくり

ア　通年の取組

学級担任は、年度末のゴールイメージと卒業時のゴールイメージをもちながら、目標と計画をステップアップさせるように、見通しを立てて学級経営案を作りましょう（ｐ４参照）。この時、学級活動や学校行事との関連を図ることも必要です。

また、学校生活でのルールや学習規律等は学年団で十分協議するとともに、学級活動における話合いを通して作成しましょう。

新入生の学級では、人間関係を新たに構築する取組と併せて、学級への所属意識を高めることや、自他の関わりの中で互いのよさに気付くことができるようにすることが大切です。

２年生・３年生の学級では、中学生としての自覚を高め、発達段階に合わせた成長を促す働きかけが必要となります。

◇　個人の目標の設定と成長の振り返り

長期的なものでも短期的なものでも、常に一定の目標をもっていれば、子どもは意欲的に学校生活を送ることができ、他者との関係性も築くことができます。また、自分が立てた目標をどれだけ達成できたのかについて定期的に振り返りをさせることで、子どもは自分の成長に気付くことができます。

◆目標づくりと成長の振り返りのポイント

□学級目標につながる個人の目標、自分の将来の目標、生活面や学習面での目標を立てさせ、ワークシートに書きこむことで、振り返りを行う材料としましょう。

□振り返りを行う際は、目標の達成と併せて、当たり前のことがどれだけできているのかについても振り返るように指導し、自分が日々の生活をどのように送っていたのかについて考えさせるようにしましょう。

□振り返りの後には、学級担任から子どもの成長や頑張りを具体的な事例を示しながら、期待する次のステップのイメージを紹介しましょう。

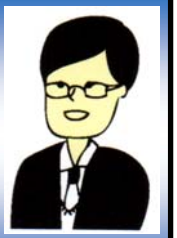
□子どもの将来への目標、学習活動における気付きや感じたことをまとめるシートをもとに、子どもと学級担任、副担任が一緒に振り返りを行い、子どもの成長を確認し合いましょう。

【留意点】目標の設定と目標の修正

①目標は具体的なもので、努力すれば結果につながり達成感が得られる内容にしましょう。

②目標は実現するためにあることを常に意識しましょう。
（目標を立てることが目的化し、個人の振り返りがないままだと、目標が達成されないことに慣れてしまうので留意しましょう。）

③振り返りを行いながら新鮮な気持ちで目標に向かえるよう、現状に合わせて目標を修正しましょう。



◇　学級生活の一日

学級における生活の仕方を、学級のルールとして明示することによって、よりよい学級づくりに向けて一人一人が大切な役割を担っていることを共有しましょう。

◇　学級生活の一年

学校行事や学級の活動等を確認し、子どもを育てるための場として一年間の見通しをもつとともに、３月末における学級のゴールイメージを子どもと共有しましょう。

◇　人間関係づくり

学校生活のあらゆる場面が、人間関係づくりの機会であることを意識して、計画的に進めましょう。特に新学期には、話合い活動やレクリエーション的な活動を取り入れ、人間関係づくりを目的とする効果的な活動が展開できるよう工夫しましょう（ｐ６参照）。

【留意点】班の中のよりよい関係づくり
「相談すること」、「自分の意見を伝えること」、「相手の意見を聴くこと」、「相手に譲ること」「互いに配慮し合うこと」等はすべて人間関係づくりにつながるものです。班で活動する時には、一部の子どもの意見が結論になっていないか注意を払うとともに、班長の役割と班員の役割を確認させ、よりよい関係をつくることができるよう働きかけていくことが大切です。

◇　子どもをつなげる話合い活動

学級や学校生活に関わる課題について、よりよい学級生活や学校生活を送るために、学級活動の場面において、子どもが主体性・自立性をもって話し合う機会を設定することは、子ども同士をつなげる活動として重要です。

話合い活動を進める時、学級担任は話合いをすることが目的化しないよう、何のために話合いをするのかを明確化し、学級の子どもとゴールイメージを共有する必要があります。そのことが欠けると子ども同士をつなげるどころか、対立や無関心の状態を生み出しかねません。また、話合いの展開が活発になるように、進め方の指導やルールの定着、役割分担等の準備をしっかり行っておく必要があります。

最近は、ホワイトボードを活用して各グループで話合いを行い、それをもとに全体共有したうえで集団決定と自己決定を進める活動も多く見られます。

また、ブレーンストーミングやＫＪ法等を活用した話合い活動を取り入れることにより、特定の子どもの意見が優位を占めるのではなく、みんなの意見が反映されて民主的な話合いを行うことができます。

しかし、話合い活動において大切なことは、話し合ったことを日々の生活の中で実践させることです。そのため、話合い活動後は集団として決定したことは何か、自分はそれをどのように実践していくのかについて確認することや、活動を通して気付いたことや感じたことなどについて振り返る時間を取ることが必要です。

【留意点】よりよい話合いを進めるために必要なこと

1　話し合うテーマは、教員から提案するだけではなく、子どもの提案を生かすことが考えられます。

2　話合いの前に学級担任は、司会者や記録者等と話合いの流れや想定される意見等について考える事前検討会をもつことによって、スムーズな話合いを行うことができるように準備することが必要です。

3　話合いは活発ならよいというわけではありません。話合いを通して意見を深める必要があるだけに、活動の流れや出てきた賛成・反対意見、提案等を視覚的に分類するツール（例えば、賛成意見＝賛、反対意見＝反のマークを掲示）等を用いることで効果的な話合いが行えます。

4　採決をする際は、話合いの深まりが見られた時に行うことは効果的ですが、安易な多数決は必ずしも正しい結論につながらない場合があります。話合いの深まりは、どれだけ最初の提案が話合いを通して質の高いものに変わったのかがポイントとなります。

5　話合いの最後には、学級担任からの思いや話合い活動の様子を肯定的に評価することで、決定したことの定着化を図りましょう。

◇　長期欠席をしている子どもへの配慮

長期欠席をしている子どものいる学級の効果的な実践例に共通するのは、学校に来ることができない子どもも学級の一員であることを伝え続けていることです。教室の中にその子どもがいなくても、常に級友であることを子どもに意識させる手立てを考えましょう。

手立ての例

①長期欠席をしている子どもについても、出欠確認では班長から欠席の報告をさせる。
②朝、欠席者の机に封筒を置き、授業のプリントや便りを班員に入れさせる。
③家庭訪問で確認した様子を、子どもや保護者の了承を得て学級の子どもに伝える。
④席替えでは、長期欠席をしている子どもの座席を優先的に考えさせる。

家庭訪問の例

長期欠席をしている子どもの家庭訪問は、子どもや保護者との信頼関係を醸成することが目的です。そのため、家庭訪問の仕方について、学校としてどのようにするのかについて、組織として共通認識を図っておく必要があります（ｐ４３参照）。

イ　学級経営の一年のスタート

新しい学級づくりは、始業式前から始まっています。配慮すべき点として、事前に分かっていることがあれば、学級開きまでに取りかかりましょう。この時、学年で意思統一しておく内容も確認しましょう。そして学級開きでは、子どもとの新しい出会いに期待を膨らませている学級担任の思いを、ストレートに伝えましょう。

◇　スタート前の準備

新年度のスタートを想像し、学級担任の個性を生かして準備することは大切ですが、学校や学年で共通理解している目標やルールから、逸脱しないようにしましょう。

◆準備のポイント

□子どもの視線の高さによって興味・関心が違ってくる場合があります。掲示物は、教室のどの場所からでも、どの子どもからも見えるように配慮することが求められます。

□配慮を要する子どもとの人間関係づくりは、学級開きを待たずに始めましょう。長期欠席をしている子どもの家庭訪問を実施するなど、個別の対応が必要と思われる子どもと事前に関係をつくる実践は多くあり、その効果が確認されています。それは、子どもだけでなく保護者にとっても安心材料となります。

ウ　１学期の学級経営

新しい年度を迎え、緊張しつつも期待に胸をふくらませている状態から、徐々に学級に慣れ、新しい人間関係をつくりあげる期間としましょう。

◇　学級経営の目標の提示

どんな学級にしたいか、子どもの思いを確認しつつ、学級担任が願う学級の在り方を具体的な言葉で示しましょう。特に卒業時に、どのような力を身に付けておいてほしいのか、どんな姿で卒業してほしいのかも併せて伝え、子どもがゴールイメージをもつことができるように働きかけましょう。

◇　係活動や当番の担当者の決定

係活動においては、学級生活をより豊かなものにするために、話合い活動を通して必要な係や仕事の分担等を子ども自身が見出し、みんなで決めていくことができるように働きかけることが必要です。

一方、当番活動はよりよい学級づくりに向けて、子ども一人一人が責任をもって取り組むことができるよう、学級担任が明確なねらいをもって割り振りましょう。

係活動や当番活動は、その学級の成熟状態を図るバロメーターとなるだけに、学級経営においてしっかりと意識しましょう。

◆係活動や当番の担当を決める際のポイント

□日直や給食等の当番を決める際には、子どもに期待を伝えながら学級担任が決めることが多くなりがちですが、子どもに順番や期間などを決めさせることも考えてみましょう。

□当番は、全員が均等に担当するよう工夫をしましょう。

□係活動の担当を決める際は、学級生活をよりよくする視点からの希望理由を子どもに発表させ、自己責任を意識付けるようにしましょう。

□話合い活動を通じて、自分たちの学級に必要と思われる係を考えさせることにより、自ら考え、行動する意識を醸成しましょう。

エ　夏季休業中における学級経営

１学期の振り返りをもとに、２学期の準備を行うとともに、課題のある子どもや支援を必要としている子どもと、夏季休業中を活用してつながることができるようにすることも大切です。

また、子どもが夏季休業を成長に向けた体験の時期として活用したり、新たなことにチャレンジし頑張ったりする時期として過ごすよう支援しましょう。また、気が緩みがちになる時期であるため、問題行動や事故等を起こすことがないよう配慮することも必要です。

◇　１学期の振り返りと２学期へのつなぎ

１学期の学級通信で取り上げたことや、学期末の子どもの振り返りをもとに、学級経営の振り返りをしましょう。

学級目標やルールの見直し等を行う際は、２学期に入ってから学級全体に働きかける内容を意識して計画しましょう。また、個別の支援が必要な子どもについては、夏季休業中に家庭訪問を行うなど、２学期のスムーズなスタートを切ることができるよう意識することが必要です。

◆１学期の振り返りと２学期へつなぐポイント

□学級通信や日誌から、４か月間の子どもの成長を確認しましょう。
□班の名簿を確認し、友達関係の構図の変化を確認して２学期の対応を考えましょう。
□１学期の成長を具体的に示し、２学期の目標を提案するように準備しましょう。
☆特別な支援が必要な子どもの学習状況を把握し、学び方や特性に応じた指導方法を検討しましょう。
☆特別な支援が必要な子どもの家庭訪問では、教室にいる状態を保護者がイメージしやすいように、１学期の学級の状態を伝えましょう。

オ　２学期の学級経営

学級集団も落ち着き、学校行事等に対する学年や学級での取組を通して人間関係が深まる時期です。同時に、取組のマンネリ化や人間関係の固定化が進む時期でもあります。学校行事等を活用して、人間関係づくりを停滞させないようにするとともに、学校行事等を行うまでの学級での取組を大切にしましょう。

スタートに際しては、担任から２学期の成長の目標や子どもへの思いを語ることも必要です。

◇　子どもの変化の把握

夏季休業後には、子どもの印象が大きく変化していることもあります。夏季休業後には、子どもの印象が大きく変化していることもあります。一人一人の４月からの成長を把握するとともに、２学期の目標等を確認しましょう。

◆変化を把握するポイント

□学級通信の返信や家庭訪問など、保護者からの情報を積極的に聞き取るようにしましょう。
□新たな班づくりを行う際に、子どもが同じ班になった友達に対して、どのような気持ちをもっているのかについて、表情や態度等を意識的に見て、把握するようにしましょう。
□授業終了後、すぐに職員室に帰るのではなく、休み時間も子どもの様子を意識的に観察するように心がけましょう。

◇　学級のルールの再確認と新しい目標設定

学級の目標やルール等について、そのままでよいか、変えるべきか、子どもと一緒に確認しましょう（ｐ５参照）。

また、新しい目標を立てる場合には、３学期までを見通した目標設定をしましょう。

◆ルール再確認のポイントと新しい目標設定のポイント

□ルールを変更する際は、他の学級担任と連携して行うようにしましょう。
□自分たちの成長を確認しながら、一段ずつ階段を上がるような気持ちで話合いをさせましょう。
□マンネリ化を防ぐために、ルールの変更がなくても内容の確認を定期的に行いましょう。
☆変更する場合は、特別な支援が必要な子どもが混乱しないように視覚的に示すなど、わかりやすく提示しましょう。

◇　自治を促す行事や学年・学級の活動の意図的な設定

子どものアイディアを生かした活動を行う場を意図的に設定し、学級の中で子どもが自立的に活動を計画・実践する経験を積ませることにより、学級のまとまりを高め子どもが「自分は頑張ればできる」と感じて、自己効力感を高められるように働きかけることが必要です。

◇　２学期の振り返り

２学期の学級通信で取り上げたことや、学期末の子どもの振り返りをもとに、学級経営の振り返りをしましょう。併せて子どもの学習状況から、授業づくりや授業展開について振り返りを行うことも大切です。

◆振り返りのポイント

□２学期の行事を経験した子どもの成長を確認するようにしましょう。
□３学期をどのように過ごす必要があるのかを意識した振り返りをしましょう。
□成果と課題を確認したら、課題を克服するための手立てについて考えるようにしましょう。

カ　３学期の学級経営

１年間の学級経営を検証するために、学級の集団としての高まりや学習面・生活面での成長等をいろいろな場面で把握するようにしましょう。

３学期は年度の集大成であると同時に、次年度へ向けて準備をする時期でもあります。次年度に向けて、次の担任に子どもの様子を申し送り、新年度のスムーズなスタートを切ることができるように留意することが大切です。

また、特別な支援が必要な子どもについては、個別の指導計画や教育支援計画等を利用して指導・支援を切れ目なく申し送る必要があります。引き継ぎシート等を作成して具体的な指導・支援方法を明らかにしておきましょう。

◇　集団の成熟と友達、教員への感謝

年度末に向けて、残る日々を大切に過ごせるよう、計画性のある毎日を意識させましょう。そして、学級替えや卒業に向けて、集団を強く意識する時期であり、一年を振り返り、人間関係の大切さを深く考えさせることや、友達や教員への感謝の気持ちをもたせることも大切です。

◇　年度末と新しいスタートへの準備

個人と学級にとっての１年間を丁寧に振り返り、成長したところを子どもにフィードバックすることにより成長を実感させるとともに、新学年に向けて生活面、学習面で準備すべきことを子どもに意識させましょう。

◆年度末と新年度への準備のポイント

□学級通信や日誌等から１年間の出来事を振り返り、自己の成長に気付かせましょう。
□４月段階の学級の状況と年度末の状況、個人の変化等を伝えるとともに、成長や頑張りにつながるさまざまなエピソードの中で、学級担任が感じたことを子どもに伝えるようにしましょう。
□学習ノートや教科書等から１年間の学習内容を振り返り、自己の成長を確認させましょう。
□各教科担当からも、子どもの成長について聞きとっておき、それを子どもに伝えることを通して、教科担当も子どもの成長をしっかり見ていることを、子どもに知らせましょう。
□友達と一緒に、自他の成長を確認し合うような活動を設定しましょう。
□新学年では、将来の自分（大人になった自分）につながる、新しい学習内容があり、新しい人間関係が生まれることを伝えましょう。
□進級にあたっては、上級学年の教室を見学したり、先輩や「きょうだい」からの聞き取りをしたりしながら、新学年のイメージづくりをしましょう。
□３年生の学級では、体験入学をもとに上級学校のイメージづくりをしましょう。

【トピック】学級の成長段階の例

学級経営は、校長の経営ビジョンのもとで、「目指す学級像や子ども像」等を描き、現在の学級の状態とのギャップをしっかりと捉えたうえで進めていく教育活動です。そのためには、一人一人の子どもや学級の状態を正確に把握し、学級担任と子ども、子ども同士の信頼関係を築くことができる学級づくりを目指した、学級経営目標を立てることが必要です。

学級担任が、目指す学級の状態をイメージし、学級経営目標に基づいて学級経営を進めることで学級の成熟度が上がっていきます。

Ｑ－Ｕを開発した河村氏は、学級が成熟していく発達過程を５段階に分類しており、第一段階は混沌・緊張期、第二段階は小集団成立期、第三段階は中集団成立期、第四段階は全体集団成立期、第五段階は自治的集団成立期と位置付けています。

それぞれの段階においては、

第一期：集団づくりに向けてルールを確立し、子ども同士の関わりを意識的に仕組むことが考えられます。この段階におけるルールの定着が、安心して過ごすことができる学級づくりに必要です。併せて、学級担任と子どもの信頼関係を構築することが大切です。

第二期：学習指導や朝の会・帰りの会等において、小グループで行う活動を組み込むことで、学級のまとまりを高めることが考えられます。この段階では、子ども同士の信頼関係を構築することを意識しましょう。

第三・四期：学級のルールがかなり定着しています。係活動や行事等を活用して、複数の小グループが協力して取り組むことが必要な場面を設定し、より大きなまとまりをつくっていくことが考えられます。

第五期：学級担任が支援者的な立場に立って子どもを見守り、行為を価値付けることにより、子どもの自主性を伸ばしていくことが考えられます。

参考：「学級集団づくりのゼロ段階」　河村茂雄　図書文化をもとに作成

（２）学級における一日の生活

ア　子どもに会うまでの準備

学級には不安や悩みを抱えて登校してくる子どもがいます。できるだけ早めに教室に行き、笑顔で子どもを迎えましょう。また、教室環境を整えておくことも大切です。教室が、一人一人の子どもの安心していられる“居場所”となるよう、温かい雰囲気づくりを大事にしましょう。

教室環境を整えることは、子どもにも環境を整えることの大切さを意識させることにつながります。また、いじめにつながる落書きはないかを確認することで、辛い思いをしている子どもがいないかといった状況もつかむことができます。

基礎学力の定着や学習上のつまずきの解消等を目的として、補充指導にも取り組みましょう。朝、短時間に集中して取り組むことは、心を落ち着かせることにつながったり、学習意欲の向上につながったりもします。また、朝読書は、よりよい読書体験をしようとする態度や豊かな心を養う一つの手立てとなることから、学級担任も一緒に読むなど、読書指導を工夫しましょう。

◆子どもを迎えるためのポイント

□明るい笑顔で子どもを迎えるとともに、気になる子どもにはさりげなく声をかけましょう。
□子どもと挨拶や言葉を交わす際には、子どもの言葉や表情から、小さな変化を読み取りましょう。
☆特別な支援が必要な子どもには、その日の体調が一日の活動に大きく影響を与えることがあります。観察や子どもとのやり取りから情報を集め、支援や指導に生かしましょう。

◆教室の環境確認のポイント

□新鮮な空気を入れるために窓を開けましょう。
□机や椅子の配置や掲示物を整え、子どもが気持ちよく過ごせる環境を整えましょう。
□黒板が消されているか確認するとともに、机の上に落書きがないか確認しましょう。
□学級文庫の本が整然と並べられているか、花瓶の花やゴミが落ちていないか等の確認をし、子どもが気持ちよく授業を受けられるようにしましょう。

◆補充指導のポイント

□解説のある解答を用意するなど、自力で解決できるものにしましょう。
□学習進度や個に応じた課題となるよう内容を工夫しましょう。
□提出されたプリントにコメントを書いたり、まとめとなる評価テストを行ったりするなど、意欲付けをする工夫をしましょう。
□補充指導は、朝だけではなく帰りの会の前や放課後に行うこともできますが、放課後に行う際には、参加する子どもが劣等感を抱かないよう、希望者も参加させる等の留意が必要です。

イ　朝の会と帰りの会の考え方と生かし方

毎日、学校生活の始まりと終わりは、担任と子どもが向かい合う「学級づくりの土台」となる大切な時間です。

朝の会は、担任が学級の全員の子どもと顔を合わす最初の時間だけに、笑顔で向き合いましょう。短い時間ですが、子どもの表情や健康面を確認できる時間でもあり、スピーチを通して友達の思いや願いを聴き、集団づくりにつなげることができる時間として活用することも考えられます。

休んでいる子どもは、欠席の理由（病気、家庭の事情、登校を渋っている等）を把握して、それぞれに応じた適切な対応を早めにとることが大切です。

帰りの会は、一日の生活を振り返り、明日も頑張ろうという前向きな気持ちを醸成する大切な時間であるため、課題だけで終わるのではなく、子どもの頑張りやよさを紹介することが大切です。

また、教室の整理等の環境を整えさせることは、生活習慣の基本を身に付けさせることにもつながります。

◆朝の会のポイント

□社会性の育成を意識して、全員で行う挨拶はしっかりと行いましょう。
□一日の目標を各班で確認し、守らせるようにしましょう。
□スピーチを行う際は、聴く姿勢を意識させましょう。
☆連絡事項や、一日の予定は見てわかるように端的・明確に伝えるとともに、健康観察は細やかさを心がけましょう。

【留意点】６つの「みる」を意識する朝の会

学級担任は、朝の会で「うかない表情をしていないか」、「隣との机の間が開きすぎていないか」、「友達と話をしているか」、「服装は整っているか」など、嶋﨑氏がいう６つの「みる」（「見る」、「観る」、「視る」、「診る」、「看る」、「相る」）という観点から、いじめの兆候をつかもうと意識しましょう。

◆帰りの会のポイント

□短い時間でできる活動（ミニエクササイズ）等を取り入れ、楽しい雰囲気で一日を終わることができるよう工夫しましょう。
□明日につながる振り返りをしましょう。
□机・椅子の整理整頓や学級文庫の整理など、子どもに教室環境を整えさせましょう。

【留意点】ミニエクササイズの導入と振り返り

ミニエクササイズを行う際は、準備がいらないシンプルなもので、全員ができる楽しいものを考えるようにしましょう。また、子どもにアイディアを出させることも効果があります。

振り返りについては、肯定的評価を返すことが大切ですが、残念な点や気がかりな点は明日に持ち越さず、その日のうちに学級担任の思いを伝えましょう。

ウ　昼食の時間の考え方と生かし方

　昼食の時間には、班で食事をする、友達同士で食事をするなど、人間関係づくりを進めるというねらいや食事のマナーを学ぶといった、社会性を身に付けていくというねらいも込められています。
　昼食の時間は、自分の存在が自然の恩恵のうえに成り立つことへの理解を深め、生命や自然を尊重する精神と併せて、環境の大切さについて学ぶ「生きた教材」にもなります。また、食材を作ってくれた人々への感謝の念や勤労を重んずる態度の育成にもつながり、キャリア教育との関連性も見出すことができます。栄養教諭等の協力を得るとともに、特別活動や各教科との関連を考えて取り組むことを意識しましょう。

◆昼食の時間を意義のあるものにするためのポイント

□昼食の時間に配膳当番をしている子どもに対して、感謝の言葉をかけることを通して、役割を果たすことの意義や協力することの大切さを伝えるようにしましょう。
□当番の子どもが昼食の準備に適した服装をしているか、手洗いをしっかり行っているかなど、衛生面にも留意させましょう。
□昼食の時間に、学級担任が我が国の伝統的な食文化等について紹介することで、子どもの知的好奇心を育て、食への関心を高めることにもつながります。例えば、「『いただきます』を食事の前に言うのは、生き物の命を食べることから感謝の気持ちをこめて言うようになったんだよ。」と紹介してみましょう。
□箸の持ち方など、食事のマナーを子どもに教えましょう。
□班員の顔が見える机の配置を心がけるとともに、時には学級担任が班に入って一緒に食べることも考えてみましょう。
□お弁当持参の学校であれば、定期的に自分で作る日を設定し、保護者の思いを考えさせる機会とすることも考えられるので、学年団で設定してみましょう。
☆食物アレルギーのある子どもを事前に把握するとともに、特別な支援が必要な子どもで食べられるものに偏りがある場合は、保護者と事前に相談して、他の子どもにどのように伝えるのかを確認しておきましょう。

【留意点】子どもに寂しい思いをさせないために必要なこと
　家庭の事情によりお弁当をもって来ることができない子どもや、保護者に作ってもらえず、昼食の時間にパンばかりの子どもがいることがあります。学級担任は、子どもの昼食の様子を観察することで、子どもの背景にある家庭や保護者の姿を想像するとともに、状況によっては、家庭訪問等を行い、改善できることについて、保護者と一緒に考えましょう。

エ　掃除の時間の考え方と生かし方

　掃除の時間は、役割や責任を果たすことの大切さを子どもに教える場面でもあります。また、床を磨くことによって心を磨くと言われるように、公共物を大切にする道徳心や学校への愛着といった、「心」を育てる時間とも捉えることができます。

　進んで掃除に取り組むことは、周りの子どもに好影響を与えるだけでなく、自己の達成感にもつながります。

　また、掃除の時間は子ども同士をつなぐことができる時間でもあります。学級担任が掃除のもつ意義をしっかりと理解するとともに、掃除の時間を使って何をするのかという意識をもつことにより、学級のまとまりの向上につなげることが可能です。

◆清掃活動において大切にしたいポイント

□役割や責任を果たすことの大切さを、学級で丁寧に話し合うとともに、掃除道具を丁寧に扱うことを通して、物を大切にする心を養いましょう。

□子どもに掃除をさせるだけではなく、学級担任も率先して掃除をすることにより、モデルとなりましょう。

□時間が余った時には、自由にさせるのではなく、子どもに掃除をしなければならないところを見付けさせる「見付け掃除」を行うなど、子どもの自主性を育てましょう。

□縦割り掃除を行う際には、掃除の手順や下級生への適切な指導の仕方などについて、上級生に事前に指導しておきましょう。

□使った道具をきちんと元の場所に戻したり、きれいに洗って干したりする後片付けまでが大切であることを意識させましょう。

☆特別な支援が必要な子どもの中には、掃除の手順を視覚的に示すことでしっかり取り組める場合があります。子どもの特性に応じて工夫しましょう。

【留意点】掃除について考えさせる話合い活動

　協力することや責任を果たすことの大切さ、協力して掃除ができるような役割分担、掃除の進め方、使った道具をきちんと元の場所に戻したり、きれいに洗って干したりする後片付けの大切さ等について、学級活動の時間における話合いを通して、子どもに考えさせることも効果的です。

オ　休み時間と放課後の考え方と生かし方

休み時間には、次の授業に向けた教員と子ども双方の、心と態勢の準備の時間という意味もあります。休み時間の子どもの様子を見たり、声をかけたりすることは、子どもの人間関係を理解するとともに、学級経営上とても貴重な情報を得ることができます。授業終了後、すぐに職員室へ戻らずに、休み時間の様子を観察すると、グループの状態や孤立している子どもの存在、学級の中の言葉の文化等に気付くことができます。

放課後は、子どもが係活動や生徒会活動等を行い、よりよい学校づくりに向けて、自分たちが何をすればよいのかについて考える時間でもあります。また、子どもと個別に関わることもできる時間なので、気になる子どもを支援する時間として活用しましょう。

◆休み時間と放課後の生かし方のポイント

※休み時間

□教室にいる子どもの様子をしっかりと観察することと併せて、子どもへの声がけを通して人間関係をつかむようにしましょう。

□教室内で飛び交う言葉に留意し、他者を傷付ける言葉がないか確認しましょう。
（いじめのきっかけや、孤立している子どもの存在に気付くことがあります。）

※放課後

□気になる子どもと面談する時間を設け、学習面や友達との関係、家庭の様子等について聴いてみましょう。

□放課後の補充指導の際には、子どもとの対話も意識し、関係を築きましょう。

□子どもの表情や発言、服装等を振り返りながら、一日の様子を記録しておきましょう。

□部活動では、学級内とは異なる子どもの姿を見ることができる場合があるため、意図的に様子を見るようにしましょう。

□子どもを迎えるうえで望ましい環境となっているのかを確認するために、教室の様子を見てから退勤しましょう。

【トピック】退勤前に教室を見に行くことの効果

担任の基本的な動きの一つとして、「一日の終わりに自分の教室を見に行く」をあげることができます。

教室に入り、変わったことがないかと注意深く観察すると、いじめの兆候や子どもの悩みなどを発見することがあります。外れかけの画鋲等、危険な箇所を直すこともできます。

子どものいない夕方の教室で、明日はどうやって子どもを迎えようかと考えながら、子どもの笑顔を想像してみてはどうでしょうか。

（３）問題等が発生した時の対応

ア　トラブルが発生した時の対応

　集団の中にいる以上、人間関係の対立は起きるものです。こうしたトラブルの解決は、一人一人の権利を保障することや社会性を醸成することにもつながるため、子どもにどのようにして解決すればよいのかについて考えさせましょう。

　トラブルは、付和雷同したり、他者との関わりを避けたりする関係の中では生まれません。他者との関わりがあり、子どもが自分の考えていることを主張する中でトラブルが発生することは、ごく自然な現象です。

　学級の中でトラブルが発生した時は、それをネガティブに捉えるのではなく、丁寧に解決していくことが、子どもの課題解決力を高め、学級のまとまりを高めることにつながります。

◆子ども間のトラブルを解決するためのポイント

□解決するためには、当事者間で解決させるのがよいか、学級の課題として提起するのがよいかということについて判断しましょう。
　（集団に提起するためには、集団がそのことを真剣に受け止める状態にあるのか、トラブルを起こした当事者と担任との間に信頼関係があるのかということがポイントとなります。）

□学級の人間関係ができている場合は、トラブルを起こした子どもの主張を友達にも聞かせ、なぜ発生したのか、どのように解決すればよいのか、繰り返さないためには何が必要かなどについて話し合わせるようにしましょう。
　（話合いを行う際には、特定の子どもへの非難とならないよう留意することが必要です。）

□トラブルを起こした子どもにも、それぞれ言い分があることを念頭に置き、教員の価値観だけで叱ることがないように留意しましょう。

□トラブルを起こした子どもが話している時には、途中で意見をはさまず最後まで聴きましょう。

□怒りの感情がどの場面で高まったのかを確認し、そのようなことを繰り返さないためには何が必要かということについて考えさせましょう。

□トラブルの内容によっては、学級担任だけでは解決できないものもあります。
　そんな時は抱え込まず、学年主任や管理職に相談しましょう。

【トピック】事故等が発生した時の対応

　学校は保護者から子どもを預かっていることから、子どもの健康や安全面に十分配慮する必要があります。事故等が発生した際、学級担任は学校で定めている危機管理マニュアルに基づいた対応をしなければなりません。小さな事故であっても、子どもにケガがないか確認する、二次的な事故の防止をする、管理職等への報告をする、保護者への連絡をする、再発防止に向けた指導をするなどの対応が必要です。

　また、事故等への対応にあたっては、一人で行うのではなく、教職員が役割を分担して複数で行うことにより、より確実な対応につなげることができます。

　各学校には、危機管理マニュアルだけでなく、防災マニュアルも備えられています。学級担任として、災害時にどのような対応をしなければならないのかについても、マニュアルを読み、いざという時に冷静な対応ができるよう、対応イメージをつくっておくことが必要です。

イ　子どもが欠席した時の対応

　欠席をした子どもは、学校を休んだことに伴う不安を多少なりとも感じています。学級担任はその不安を想像して、子どもが安心して休め、再登校できるよう支援しましょう。特に、欠席の理由が体調不良であっても、背景に友人関係や学習面等の不安がないかどうか、日頃の様子等を振り返り、不登校の兆候を見逃さずに対応することが重要です。

　また、欠席だけではなく、遅刻や早退、保健室への来室の増加も同様の傾向を示すものとして、見逃さないことが大切です。

　子どもが欠席した時、保護者からの連絡がない場合は、学校から電話をして子どもの様子を聴くようにしましょう。また、病気やケガによる欠席であれば、病院の受診を促しましょう。放課後は、欠席した子どもの様子を速やかに確認することが必要です。

◆欠席状況ごとの対応のポイント

※欠席初日

□安心して休んで次の日に登校ができるよう、電話等で直接声をかけましょう。

□学級担任からの手紙や連絡カードに、友達のメッセージを添えるなど、仲間も心配していることを伝えましょう。

□子どもの机の上などを確認し、次の日、安心して学校生活を送ることができるよう、準備をしておきましょう。

※欠席が続く時（連続して３日、あるいは月に３日を超える等）

□家庭訪問等を通じて家庭での様子などを聞き、保護者との連携をさらに進めましょう。

□悩みを抱えて辛くなっている可能性を考慮し、不安を和らげる温かい声がけをしましょう。

□欠席している子どもの状況を教育相談の担当者や学年会に報告し、休んでいる背景を検証しましょう。

※累計欠席が１０日を超えた時

□校内支援委員会の方針のもとに、支援チームをつくり、個別支援票による具体的な取組（支援の方向性、いつ・誰が・どこで・何を支援するか）を検討しましょう。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携も考えましょう。

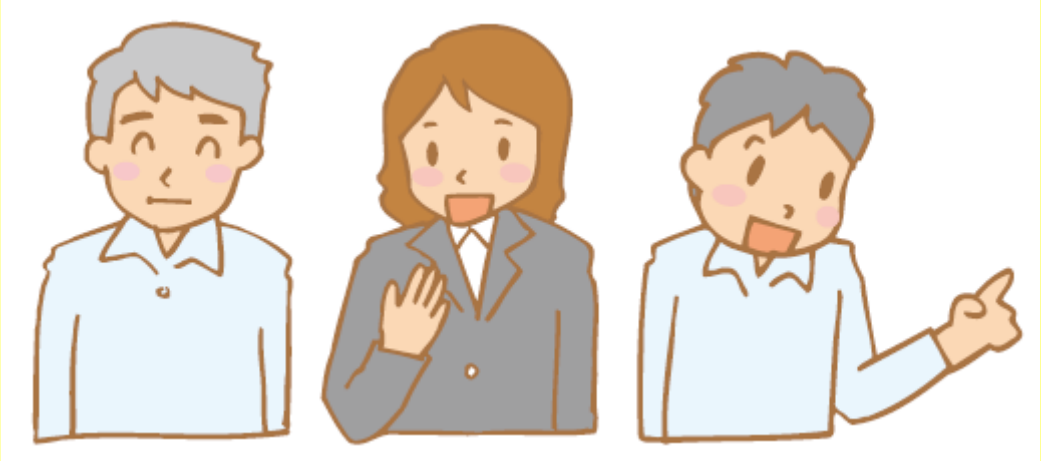
【留意点】　不登校のサインを見逃さないために心がけること

　以下のようなサインが出ている子どもは、そのままにしておくと不登校になる可能性があるため、早期の対応を心がけてください。

- 表情が乏しくなる
- 活動が緩慢になる
- 一人でいることが増える
- 教員のそばから離れようとしない
- 欠席の理由がはっきりしない
- 頭痛や腹痛等を訴えることが増える
- 集中力がなくなる
- 「泣く」「怒る」等の感情の起伏が激しくなる
- 宿題や提出物を忘れがちになる
- 月曜日の遅刻や欠席が増える

参考　「教師のためのカウンセリングワークブック」　菅野　純　金子書房
「不登校チェックリスト」　高知県心の教育センター

実 践 編
（保護者）



（１）学級通信の工夫と留意点

ア　保護者を意識した学級通信

学級通信は、行事の予定や日程を知らせるだけではなく、学校や学級における子どもの生活や学習の様子等を家庭へ知らせるとともに、子ども同士、場合によっては保護者同士をつなぐことができるツールです。教員によって学級通信を出す・出さないがあれば、保護者の学校に対する不信にもつながりかねないため、学校として学級通信に対する考え方や発行の仕方を確認し、学級通信で取り上げる内容や発行回数、通信の紙面サイズ等を決定していくことが必要です。

また、学級通信は、具体的な内容を通して、教員の思いを保護者や子どもに伝えることにより、教員と保護者・子どもをつなぐことができるため、何のために書くのかを意識することが大切です。学級通信は学期末・年度末には、自分自身の教育実践の足跡として、自分の学級経営の在り方を省察する材料にもなります。

保護者は、学級通信を読むことで、子どもの学校での様子を知るだけに留まらず、教員がどのような視点で日々子どもに接しているか、安心して任せることができる教員なのかといった視点から読んでいると考えられます。教員が学級通信を通して自らの思いを具体的に伝えていくことで、保護者の理解や協力等につなげていくことができます。

◆子どものよさや頑張りを伝えるポイント

□授業や学級活動、学校行事等の中で見られた子どものよさや頑張っている様子などの、具体的な場面を捉えて伝えましょう。

□教員が目指したい学級の子どもの姿に近づく場面が見られた時、その内容を教員の思いとともに伝えましょう。

【留意点】通信への掲載上の配慮

子どものよさや頑張りを伝えた時、保護者からの返事をもらう場合があります。その内容を掲載する際は、保護者の了解を得たり、匿名で掲載したりするなど、学校としてのルールを確立しておくことが必要です。

◆学習における取組や進捗状況を伝えるポイント

□授業の感想など、学習の状況がわかるものを掲載しましょう。その際、学習のねらいに関するものや子ども同士の関わり、友達のよさに気付いているものなど、学校での子どもの生活を保護者が把握できるようにしましょう。

□個人情報等の取り扱いや写真の掲載については、事前に学校全体で保護者の許可を得るなど、学校として統一しましょう。

◆子どもの日記や感想等を掲載する場合のポイント

□子どもの日記や授業の感想等を掲載する場合は、本人の承諾を必ず得るようにしましょう。
□子どもの日記や授業の感想等を掲載する場合は、教員のコメントを添えましょう。
□評価ではなく、寄り添う視点、例えば共感できることや喜びなど、読み手の立場に立って書くようにしましょう。
□子どもの書いた日記や感想のよい点に着目しましょう。
□発達段階に合わせた意図のあるコメントを心がけましょう。

【留意点】コメントに悩む時
子どもの日記や授業感想等に対するコメントに悩む時は、再度、自分の学級経営を見直しましょう。育てたい子どもの姿や学級づくりのねらいを明らかにすることで、コメントすべき内容もおのずと明確になってきます。

【留意点】抜かりない子どもの紹介
掲載する子どもが偏ったり、抜けたりしないように注意することが大切です。チェック表を作成し、掲載した日やナンバーを記録しておきましょう。

イ　子ども同士の結び付け

学級通信の中で個の頑張りを認め合う種をまいていくことは、子どもの他者に対する肯定的なまなざしを育てることにつながります。また、学級の集団の成長や、子どもの頑張りを書いた学級通信を子ども同士で読み合うことにより、子どもは学級への所属意識をもったり、友達や自分の成長に気付いたりします。さらに、子ども同士で読み合うことは、共感的な人間関係に基づく集団の形成や、互いに大切な存在として認め合うことができるような集団づくりにもつながります。

◆個の頑張りを集団全体へ波及させるポイント

□学級の中で頑張った子どもだけではなく、ともに頑張った仲間の存在にも着目して評価しましょう。
□友達の頑張りを応援したり、喜んだりする様子が見られた時には、積極的に評価しましょう。
□子どもが、集団としての意識をもてたことや自分の学級のよさに気付けたことを、積極的に評価しましょう。

◆集団を育てるために教員同士で確認すべきポイント

□他の学級と比較するのではなく、何がよかったのか、なぜよかったのかを具体的に伝えるようにしましょう。他の学級に対する賞賛や、ともに頑張っている姿を併せて伝えましょう。

□自分の学級のみでなく、学年や学校全体の状況の視点をもって伝えましょう。

□学級通信のねらいや視点については、子どもや保護者の不信を招かないよう、年度当初に学年団や同僚と、以下の点を確認し合いましょう。

1　学級通信発行のねらい（学級担任の思いや願いと重ねて）
2　学級通信の発行の仕方
3　学級の取組とねらい　等

【留意点】多くの人に子どもと関わってもらうための工夫

学級通信は事前に管理職や同僚にも見てもらうことが必要です。そうすることは、組織としての取組につながり、保護者等からの意見や問い合わせがあった場合の迅速な対応につながります。

また、管理職等からの子どもへの声がけは、子どもにとって大変励みにもなります。保護者同様に学級通信を通して、たくさんの関係者を巻き込み、子どもに関わってもらいましょう。

【トピック】オリジナリティを出すための工夫

学級通信にはそれぞれ名前が付けられますが、決める時は学級担任の思いをもとにして付けるだけでなく、学級開きで教員の「こんな学級にしたい！！」という思いを子どもに伝えた後に、題名を子どもと一緒に考えることも効果的です。

また、子どもにも協力してもらい、「今日のちょっといい話」、「みんなでチャレンジ」など、学級通信の意図に沿うコーナー等を設けることも考えられます。

【留意点】学級通信でお知らせや保護者に何か依頼する場合の配慮

学校や学年の行事日程等のお知らせや保護者へ提出物の依頼を掲載する場合は、締切日までの余裕をもたせ早目に連絡をしましょう。どうしても急ぐ場合は、謙虚な姿勢で協力をお願いするようにしましょう。

◇　子どもから発行する通信

教員の通信の他に、子どもが発信する通信もあります。初めは、多少時間がかかるかもしれませんが、慣れてくれば書くことを自分で決めてくるなど、楽しみながらできるようになってきます。発行担当者がレポートした記事を学級通信に掲載する方法や、全員が順番に記者となり、オリジナルの記者名（ニックネーム的なもの）で記事を掲載することも考えられます。

６人班ならＢ４用紙を６分割し、班のメンバーで相談してその日のことを書いて発行するなどの工夫をしてみましょう。レイアウト用紙を作成しておくことも工夫の一つです。

【トピック】各班の個性を生かした通信

班で B4 用紙を６分割してその日のことを書く場合、分割したマトリックスに①今日の出来事、②授業での気付き（わかったこと、友達の頑張り等）、③班の頑張り、④教員からの言葉（励まし・よさの紹介・注意された事柄等）、⑤今日の反省（できたこと・できなかったこと）、⑥明日に期待することなどを書くことで、各班の個性を引き出すことが考えられます。

（２）保護者との関係づくり

ア　保護者会と保護者面談

保護者会や保護者面談は、学級や子どもの様子を伝えるとともに、子どもの進路をどのようにして実現するのか、課題をどのようにして解決していくのかということについて一緒に考えることができる重要な機会です。保護者は、自分の子どもの学級での様子を知りたがっています。担任はどんな人だろう？子どもは楽しくやっているだろうか？と不安や期待を感じています。保護者に安心して任せられると感じてもらうためには、学級担任が個人情報に配慮しつつ、学級の強みや弱みを伝えるとともに、「子どもの成長を一緒に考える」ことが大切です。

保護者会や保護者面談の時には、できるだけ多くの保護者の方に参加してもらうことができるよう、参加の呼びかけ方に工夫が必要です。そして、保護者が参加してよかったと思えるような会の運営を心がけることで、保護者との信頼関係を育みましょう。また、保護者に子どもの頑張りを伝えるとともに、その頑張りが見える子どものエピソード等をもち帰ってもらうことも大切です。そうすることで、「満足できる保護者会」という評価も得ることができます。

◆保護者会と保護者面談をよりよいものにするためのポイント

□年度当初は学校の教育目標、重点事項、学級目標のねらい、学級担任としての抱負等を伝えることも大切ですが、学級担任の一方的な話にならないよう留意しましょう。

□ペアやグループで、「学級担任に聞きたいこと」、「子育てで困っていること」、「家庭学習の仕方について」等のテーマを設け、保護者同士で話し合い、発表してもらうことにより、参加の満足度を高めましょう。

□自分の頑張りを強調したり、言い訳ばかり言ったりするのではなく、謙虚な気持ちで保護者と向き合いましょう。

□学期末や長期休業前の保護者会では、子どもの頑張りを伝えるとともに、長期休業中の過ごし方等についても伝えるようにしましょう。

□学級の課題については、保護者にも伝え、解決に向けた方向性を示すことと併せて、解決に向けた協力を引き出すようにしましょう。

□保護者面談の際には、対面に座って話をするのではなく、斜めに向かい合って座ると話しやすくなるので意識しましょう。

□タイムスケジュールを保護者に示し、時間の目途をもって参加してもらえるようにしましょう。

□出席できなかった保護者にも、配付した資料や説明したことをまとめて後日送付することや、気になる子どもの保護者であれば、家庭訪問をして直接持参することも考えましょう。

【トピック】ある中学校の取組

中学校では、卒業後の進路に関わる保護者面談や三者面談を行っていますが、特に新任の学級担任にとっては、保護者からどのような質問が出るか、どんなアドバイスをしていけばよいかについて不安を感じることがあります。ある中学校では、新任の学級担任がしっかり面談できるよう、先輩教員が保護者役になり、一般的な質問から厳しい質問を投げかけ、シミュレーションを行い、不安を取り除く取組をしています。

イ　家庭訪問

家庭訪問は、保護者と一緒に、子どもの成長を支援していくための有効な方策であり、学級の中では見えない子どもの生活が見える機会です。家庭訪問には、計画的な訪問、不登校等支援の必要な子どもの家庭への訪問、子どもが問題等を起こした時の臨時的な訪問があります。

家庭訪問をする時は、事前にその目的を、管理職等との間でしっかり確認しておく必要があります。その際、保護者とだけ会うのか、子どもも同席してもらうのかも確認しておきましょう。また、日頃から保護者との信頼関係を築くことを意識しましょう。

◇　日頃からの関わり

日頃から、子どものよい点や頑張りを見付け保護者に連絡するなど、コミュニケーションを図ることが必要です。そうすることで保護者の対応は心を開いた親しみのあるものになってくるのではないでしょうか。子どもが問題を起こした場合の家庭訪問においても、日頃の関わり方次第で、保護者の反応は柔らかいものにも、厳しいものにもなります。日頃から子どものことをよく見て理解することが、保護者との信頼関係を築くうえで大切です。

◇　計画的に行う家庭訪問

「保護者からの信頼や親近感を高める」、「地域や家庭環境の実態を知り、子どもの家庭や学校外の様子を聴く」、「保護者の願いや子どもの特性を聴き、子ども理解に役立てる」などの目的のために行います。

◆計画的に行う家庭訪問のポイント

□気になる子どもの家庭は、じっくり話を聴けるよう、訪問順を最後にすることを考えましょう。
□子どもの頑張りやよい面を伝えてから、本題に入りましょう。
□教員側から話すことは少なめにし、保護者の話を傾聴することに重点を置きましょう。
□他の家庭の批判や同僚の批判には同調しないようにしましょう。
□他の子どもや家庭の個人情報を漏らさないようにしましょう。
□約束の時間を守り、話が長くなる場合は機会を改めましょう。
□学校への批判や要望に対しては、原則として即答を避け、学校に戻り管理職等に相談してから回答するようにしましょう。

◇　不登校の子どもの家庭への訪問

不登校の子どもの家庭を訪問する際には、子どもの状態に配慮することが大切です。訪問の際、子どもに会えない場合には、手紙を置いてくるなど、大切に思っているという気持ちを伝えましょう。保護者が先生と話をしたいという気持ちをもっている場合は、保護者の希望に合わせて会うことを考えましょう。

家庭訪問の目的は、“子どもとの信頼関係づくり”です。欠席が長期化すると外部の人間との接触は限られ、教員との関わりが唯一という例も多く見られます。地道に根気強く、継続した関わりをすることが必要です。

家庭訪問をすれば多くの情報を収集することができます。その情報をもとに支援会議を行い、支援の方向性や具体的な関わりを考えることもできます。支援や関わりを通して、子どもにエ

ネルギーがたまってくると、学校の相談室への来校や、他の相談機関への通所も可能になってきます。しかし、登校をせかすような関わりは、子どもとの関係が途絶えてしまったり、関係修復に大きな時間を要するようになったりする場合があるので留意しましょう。

◆子どもが長期欠席をしている場合の家庭訪問のポイント

□子どもが連続して３日、あるいは月に３日を超えて休んだら家庭訪問をしましょう。欠席がどのような理由であろうと、「気になってちょっと顔を見に来ました。」と言うことは、子どもや保護者に安心感を与え、信頼関係の構築につながります。
（累計欠席が１０日を超えた場合は、校内支援委員会の方針のもとに支援チームの中で、家庭訪問の仕方〈①いつ　②誰が　③どのような目的で　④何をしてくるのか〉について校内で共通理解を図ることが必要です。）

□欠席が続いているので訪問したいことを保護者に連絡し、子どもには、会いたくなければ無理に会わなくてもよいことを伝えてもらいましょう。基本的にはまず、保護者や本人に訪問することの確認をとることが大切です。

□家庭訪問では、子どもが家で何をしているのか、趣味は何かなどの情報を収集しましょう。子どもの好きなことはさまざまです。会話をすること、音楽、映画、漫画、絵を描くこと、何かを作ること、ゲーム等、子どもの好きなことを共通の話題にして、関わることでつながりをもちましょう。また、勉強したいという気持ちが強くなった時には、学習をサポートする方法を保護者と一緒に考えましょう。

◇　子どもに問題があった時の家庭訪問

保護者と問題点についての共通理解を図り、保護者と協力・役割分担のうえ、子どもの行動変容を目指すことを目的として行います。

◆子どもに問題があった時の家庭訪問のポイント

□大筋の事実関係を把握してから、保護者に対応しましょう。急いで問題の概要を伝えなければならない場合は、「詳細については現在確認中です。」と断ったうえで保護者と対応しましょう。

□原則として家庭訪問をしましょう。それが難しい場合は来校を求めましょう。

□家庭訪問の時や保護者が来校した時には、学級担任だけでなく、できる限り複数（管理職・学年主任等）で保護者に対応しましょう。

□家庭訪問をする時は、訪問する目的や伝える内容について、管理職に事前に説明しておきましょう。

□子どもの行為について、本人、保護者、学校の三者で確認したうえで、一緒に考え、問題解決に向けて取り組むという姿勢を示しましょう。

□子どもが自分の言動の問題点に気付き、どういう言動をすればよかったのか、これから何（謝罪・生活の改善等）をすべきか理解できるよう問いかけて、自分で行動に移せるように働きかけましょう。

□子どもが望ましい行動をとることができるようにするために、学校と保護者が協力し、学校がするべきことと保護者・家庭がするべきことを確認しましょう。

ウ　特別な支援が必要な子どもの保護者との関わり方

特別な支援を必要とする子どもの保護者は、子どもの生活、学習、進路、対人関係などさまざまな場面に悩みや不安を抱いていることも多く、学級担任が保護者と関わっていくためには、保護者の声を聴き、ともに歩んでいこうとする姿勢を示すことが不可欠です。

保護者の心の安定は、子どもの心の安定へつながっていきます。保護者の学校に対する信頼を得るためには、その子どもを含んだ学級経営の在り方が大切になります。特別な支援が必要な子どもを肯定的に捉えた教員の言葉や接し方、行動によって、周りの子どもたちは、「一人一人に違いがあっても、それぞれが大切にされる存在である」ことを理解していきます。

このような教員の見方や子ども同士の関係性は、保護者に安心感や希望をもたらし、信頼へとつながっていきます。

◆保護者と関わるうえでのポイント

☆学校の支援の具体を伝え、保護者に安心感を与えましょう。
☆子どものありのままの姿を認め、指導・支援のよりよい方策を保護者と一緒に考える姿勢を示しましょう。
☆全教職員で指導・支援方法について、共通理解を図ったうえで対応しましょう。
☆これまでの指導・支援内容を、個別の指導計画等で把握したうえで保護者と接しましょう。
☆日頃から子どもの長所や強みを意識的に見付け、プラスの出来事を保護者に伝えましょう。
☆気になることがある時には、子どもの様子とともに、学校での対応の具体を伝えましょう。
☆家庭訪問を行い、保護者と話す場をもちましょう。

◆関係機関との連携のためのポイント

☆子どもへの指導・支援は、診断の有無に関わらず「気になる」「何か支援をしなくては」と感じた時から始めましょう。
☆保護者、医療、福祉、教育の関係者が連携した支援を行いましょう。
☆「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」を作成し、指導・支援方法を確実に申し送りましょう。

【トピック】特別支援教育学校コーディネーター
保護者は子どもの問題によって、大きな不安を感じている場合があります。状況によっては、特別支援教育学校コーディネーターが窓口となり、担任と保護者をつないでいくことが考えられます。

エ　子どもへの虐待が疑われる保護者との関わり方

児童虐待が疑われる保護者の中には、自分自身の悩みや困っていることを誰にも話すことができずに悩んでいる方もいます。学級担任は、受容する態度で保護者の話を聴き、支援する立場に立つことで関係を築く必要があります。

また、虐待にあたる行為であっても、保護者が「しつけ」の一環と考えている場合や、保護者自身にも、虐待に至ってしまったさまざまな背景があり、不安を感じていたり困惑していたりするだけでなく、その保護者自身も傷付いている場合があります。

◆子どもへの虐待が疑われる保護者との関わり方のポイント

□学級担任には、保護者を支援する姿勢が必要ですが、個人で対応するのではなくチームで対応することや、関係機関と連携して対応することにも留意しましょう。

□保護者の言動の背景や気持ちを理解し、寄り添う態度で接しましょう。
（ただし、虐待を容認するものでないことは言うまでもありません。）

□保護者を否定的に捉え、行為を非難するのではなく、改善に向けて保護者としてできることは何かについて、一緒に考えましょう。

虐待が疑われる保護者との関わり方の一例

接し方のポイント	かける言葉（例）
□保護者の意識に焦点を当て、支援する言葉を心がける。 □保護者の子育ての不安や悩みなど、保護者の思いを受け止める。	「今、困っていることはないですか。」 「今まで頑張ってこられたんですね。」
□「今、子どもがどんな思いでいるのか」を考えてもらう。	「〇〇さんは頑張っていますよ。」 「〇〇さんはお母さんのことが好きなんですよ。」
□これまでの子育てを責めるのではなく、一緒に考えていくという思いを伝える。 □あせらず時間をかけて改善していくことを伝える。	「一人で苦しむ必要はないんですよ。」 「もう一度子育てを考え直してみましょう。」 「どうしたらいいか一緒に考えましょう。」 「できることからやっていきましょう。」
□指示や指導ではなく、選択肢として具体例を提示することを心がける。 □できれば定期的に話し合うことを約束したり、専門機関を紹介したり、親の情緒的ケアを考える。	「〇〇などの方法もありますよ。」 「これからもいっしょに考えていきましょう。」

参考　「いのちを守り育むために」　高知県教育委員会

※児童虐待が疑われる保護者との関わり方については、「いのちを守り育むために」（高知県教育委員会）をご覧ください。http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310801/gyakutaisiryou.html

（３）保護者や地域からの苦情・意見への対応

保護者や地域からの苦情・意見には、さまざまなものがあります。どのような苦情・意見であっても相手の話をしっかりと聴くことが、互いの意思疎通の第一歩です。

また、苦情や意見は一つの手段に過ぎず、真意は別のところにあるということが往々にしてあります。真意をつかみ、保護者や地域の方々と確かな関係を築いていくためにも、しっかりと聴き、真摯に対応することを心がける必要があります。

真摯な苦情・意見への対応は、それまでの学校の取組を振り返ることや、保護者や地域の方々の意見を聴くことができる大きなチャンスとなり、よりよい学校づくりにつながることがあります。特に保護者との対応においては、子どもを取り巻く環境を直接知ることにつながり、子どもとのよりよい関係を築く土台となります。

苦情や意見の中には、学校として配慮不足であった点や、子どもに対する教員の不適切な関わりに起因しているにもかかわらず、学校側がそれに気付いていない場合があり、学校の取組や自己の実践を振り返ることが大切です。

◆対応におけるポイント

□初期対応の在り方で、その後の展開が大きく異なってきます。軽率な対応は厳に慎みましょう。

□保護者対応は、学級担任一人で対応するのではなく、管理職や同僚に相談し組織で対応するとともに、記録を残しておきましょう。なお、保護者の前で記録する場合は、事前に了解を得るようにしましょう。

□保護者や地域の苦情の背景には、子どもの日常生活が密接に関係していることを意識して対応しましょう。特に保護者については、自分自身が子育てについての不安や悩みをもっているケースが多いことを意識しておきましょう。

□「何を訴えたいのか」「何を望んでいるのか」など、相手の思いを理解できるよう真摯に聴き、解決に向けた手立てを保護者と一緒に考えようとする姿勢をもちましょう。

□傾聴の姿勢を示せるよう、うなずいたり、相手の言ったことを確認したりして話を聴くようにしましょう。

□その場で答えられない内容については、必ず後で回答する旨を伝えましょう。

□電話ではお互いの思いや考えが伝わりにくいので、できるだけ直接会って話をしましょう。

□子どものよりよい成長に向けて、お互いに何ができるかという視点で話し合うようにしましょう。

□日頃から、保護者や地域に学校を開くことで、信頼関係を築きましょう。

【留意点】「モンスターペアレント」という言葉

保護者からの苦情・意見がくると、教員の中には「モンスターペアレント」が来たと身構える方がいます。しかし、「モンスターペアレント」という言葉は、相手を否定する言葉であり、排除につながる不適切な表現です。そのように考えていたとしたら、それが態度や表情に表れ、相手の怒りを鎮めたり誤解を解いたりすることが難しくなります。

中学校教員が知っておきたい小学校の特性と学級経営の傾向

小学校の学級担任は、その多くが朝から放課後まで学級の子どもと関わるため、一人一人を観察したり、声をかけたり、健康状況を把握することができる時間が多くなります。そのため一人一人を把握しやすい環境にあるということができます。また、中学校と比べると子どもの通学距離が短いため、家庭訪問に行きやすい地理的環境にあります。

小学生は６歳から１２歳と、中学生以上に子どもの発達の幅が広く、学年ごとに子どもの実態に応じた関わりが求められます。また、発達段階によっては、話し方を変えないと子どもに意味が通じないこともあります。それだけに小学校の子どもは、教員の丁寧な関わりの中で育ってきていることを理解しておく必要があります。

中学校における「中１ギャップ」と言われる状況を改善していくためには、小学校時代の丁寧な関わりを中学校教育の中でも継承しつつ、段階的に主体性を育むような工夫が必要となっています。

小学校時代は児童期と呼ばれ、小学校という集団に入ることにより、生活の範囲がこれまで以上に急速に拡大します。小学校では学習を重ね、知的理解や技能を習得する中で、できることが多くなり、「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」という欲求を高めることができる時期です。また、友達との相互交流を通して人間関係が広がり、社会性も大きく進展する時期でもあります。

【小学校の学級経営の傾向】

□学級担任が基本的にすべての教科を教え、授業時間だけでなく休み時間、給食、掃除、生徒指導等を行い、学級担任が学級の子どもと一緒に過ごす時間が多くなる。

□学校としてまとまった校則はなく、学級で決めたルールに沿って学級経営が進められる。

□子どもと教員の距離が近く、長休み時間等には学級担任と子どもが一緒に遊んだりして、関係性を築こうとしている。

□子どもをほめたり、柔らかな物腰で子どもと接したり、子どもの名前も「〇〇くん」や「〇〇さん」で呼んでいることが多い。

□Ｑ－Ｕの結果を見た時、全国的な傾向として、ルールの確立が低い「なれあい型の学級」と呼ばれる学級が見られる。

実践事例編

実践事例編

紹介している事例は、県教育委員会のホームページに設けた「学級経営に関する実践事例」について記載するサイトに、県内の教員から投稿していただいた実践事例です。タイトルの後についているページ番号は、タイトルと関連する項目が書かれているページですので、「基本編」や「実践編」と関連させて、学級経営の参考としてください。

なお、紙面の都合上紹介できていないものや、表現を一部修正しているものもあります。

【基本編】に関連する実践事例

（５）学級の環境づくり　ア　学級のルールづくり　　ｐ５

１　その場でよい行為をほめ、いけない行為は指導した。〈小学校〉

２　２週間に１回程度の定期的に行う班長会で、学級の課題を確認した。後日、班長会で出された課題を学級内に報告したうえで、解決方法を班会で探し、各班からの意見を参考として、学級全員で確認しながら必要な学級独自のルールを作成した。〈中学校〉

３　ルール違反があった時、「～しなさい。」という注意ではなく、「どんなルールになっていたのかな。」など、ルールを確認するような声がけをした。また、ルールが守れている時や、当たり前のことが当たり前にできているときに、「ありがとう。助かった。」等の肯定的な声がけを行った。〈中学校〉

４　学級の「目標」を話合い活動により決定し、それに向けてどんなことができるかを子どもに考えさせ、行動させる取組を行った。併せて、「クラス目標」及び「目標達成のための目当て」を教室の正面に掲示し、折りに触れて子どもにできているかどうかを自己評価させた。〈高校〉

（５）学級の環境づくり　イ　学級の人間関係づくり　　ｐ６

１　エンカウンターを、朝の会や帰りの会において継続的に実施した。スキルを学び、普段の生活の中で、生かされている場面を見付け、ほめることで効果が高まった。子ども同士のつながりが強くなり、友達がいることのよさを感じることができるようになった。学級への所属意識や自己肯定感が少しずつ育ってきた。〈小学校〉

２　帰りの会で、「ごめんね、すごいね、ありがとうのコーナー」を作り、トラブルはその日のうちに解決するようにした。また、友達からほめてもらうことによって自尊感情を育むことができ、気持ちよく下校することにつなげた〈小学校〉。

３　定期的に子どもと面談を行い、子どもの思いを聴いた。また、頑張っていることやよいところをほめて、認めた。さらに、朝の会や帰りの会にエンカウンターを取り入れた。〈中学校〉

４　特別支援学級における理解教育の取組として、発達段階（学年）に応じて、ことわざ、漢字、国名等内容を工夫したカルタ取りを行った。個人戦でなくグループ対抗で行うことで連帯感が高まった。〈中学校〉

５　欠席した子どもの机の上に大きな封筒を置き、授業中や帰りの会で配られたプリントを同じ班の子どもが、丁寧に封筒に入れていった。その日が終わると、学級担任は封筒の下の部分に今日の学校の様子やその子どもへの温かい言葉をいっぱい書いて、休んでいる子どもの家に届けた。〈中学校〉

６　友達のよいところを互いに書いて、後で本人に渡す取組を行ったことで関係性が高まった。〈高校〉

７　誕生日の子どもの名前を朝のショートホームルームで紹介し、相手が嫌になるようなことは絶対に書かないというルールで、みんなにバースデーカードを書かせた。最初は心配もあったので、学級担任が子どもが書いたカードの点検をした。日頃、あまり話をしたこともない友達からも、温かい言葉をもらって、だんだんと仲良くなった。カードを読んでいる時の子どもの顔は、本当にうれしそうだった。〈高校〉

８　社会的スキル（話の聴き方、伝え方、挨拶等）への関心を高め、社会性を獲得できるよう、相手を尊重した頼み方、断り方の学習を行った。〈高校〉

（５）学級の環境づくり　ウ　教室の整備と掲示　　ｐ７

１　子どもの自己肯定感を育み、お互いが認め合う学級になるために、帰りの会で「いいとこ見付け」を行った。教室の後ろの壁に掲示した「クラスの木」に、見付けた内容を「葉」や「実」の紙に書いて掲示した。参観日などには、保護者も見てくれるので、子どものよさが認められる機会が増えた。〈小学校〉

２　毎日の帰りの会で、頑張っていたり、友達を助けてあげたりしている人の名前と行ったことを子どもに発表させた。また、発表したことをクラスのキャラクター（子どもが考えた）用紙に書き、教室に掲示した。クラス内で発表することだけでなく、教室に掲示することで他の子どもの目に触れ、自己肯定感を育むことや、お互いを認め合うことができるようになった。毎日１つは帰りの会で発表することを目標にしてきたので、友達のよい所を見付けることを心がける子どもが増えてきた。〈小学校〉

３　毎日、放課後の教室の掃き掃除をし、机を揃えた。朝、子どもが気持ちよく登校でき、落ち着いた教室になった。〈小学校〉

４　教室にゴミがあったり、机・椅子が乱雑であったりという状況では、落ち着いた学習ができないので、机の位置を床にマジックで記し、机を移動しても元の位置がわかるようにした。

　また、掃除がない日は、「ゴミを一人５個拾いましょう。」等の指示をし、どんな小さいゴミでも学級担任が数を数え、クリアした子どもから席に着かせた。学級担任は放課後、必ず教室を点検し、翌日気持ちのよいスタートができるように整えた。〈中学校〉

５　文化・レク班とともに、みんなに読んでもらいたい本を学級文庫として教室のコーナーに設置した。〈高校〉

（５）学級の環境づくり　エ　Ｑ－Ｕを活用したよりよい学級づくり　　ｐ８

１　「生活げんき調べ」やＱ－Ｕで家庭や学校での生活実態を把握し、これからの生活に対して目標をもたせた。〈小学校〉

２　Ｑ－Ｕを実施し、学級満足度尺度のプロット図に応じた活動を、短時間で継続的に取り入れた。例えば、朝の会、帰りの会等を利用して「受容感」を育みたい場合、その目的に特化した取組を継続することで、効果が得られた。〈小学校〉

３　Ｑ－Ｕを実施・分析し、学年団で集まり分析の報告を行った後、一人一人の子どもへの手立て（自尊感情を高めるためにほめる等）を考えた。〈中学校〉

（６）子どもや保護者との信頼関係づくり　　ｐ９～ｐ１１

１　子ども一人一人に、毎日することや当たり前のことができていれば、積極的に肯定的な声がけを行った。そうすることで、学級の中で子ども同士の肯定的な声がけをよく聞くようになった。〈小学校〉

２　遅刻はしないと前日に約束をしていたにもかかわらず、遅刻をしてきた子どもに対して感情的に叱るのではなく、「事故に遭っていないか心配していたよ。遅刻した理由を教えてくれるかな。」と声をかけ理由を聞いた。そのうえで、子どもに明日遅刻しないために何をするかを聞いて、帰りの会の後にも念を押して帰した。次の日から、遅刻をしなくなった。〈小学校〉

３　学級の中のおとなしいが運動はよくできる子どもに対して、学級担任から頑張りをほめていった。さらに、体育の授業を担当している教員と相談して、体育の時間の頑張りを教えてもらい、「体育の授業を見たけど、上手にパスを出していたね。〇〇先生もあなたのパスがいいところに出ていると言っていたよ。」とほめた。その後、自信をもつことができだしたのか、少しずつ積極性が見られるようになってきた。〈中学校〉

４　年度当初に、「保護者から子どもが自信がなくて心配です。」と相談を受けていたので、学校生活の中で、頑張っている姿やできている点等について、1～2 行程度の文章にまとめ定期的に「〇〇さんの成長」と題して保護者に手紙を送った。保護者が手紙を読んで、夕食時などに肯定的な評価を返していくことにより、子どもが自信をもって発言したり、行動したりするようになった。また、保護者からも信頼され、保護者がＰＴＡの学級役員になってくれ、側面から学級経営に協力してくれるようになった。〈中学校〉

（７）学級経営と教育課程　ア　学級経営と教科学習　　ｐ１２

１　国語の時間に５・７・５の１７音で俳句を作ることで、感受性が育ち、言語感覚が豊かになった。選句会では、新しい発見や感動、共感もあり学級が一つになった。〈小学校〉

２　通常の学級において、特別な支援を必要とする子どものニーズを大切にした学習支援（授業者の説明や発問・質問、教材掲示、教材の工夫、実物の提示等）を行った。視覚、聴覚、嗅覚、触覚を使ったものや、読む、聞く、書く、話す活動をバランスよく行うことで子どもの興味や関心、思考も深まった。〈中学校〉

（７）学級経営と教育課程　イ　学級経営と道徳教育　　ｐ１３

１　日常生活の中で、存分に語り合える心の開放された学級づくりを行っていくことを根底にし、道徳の時間や学級会を展開した。そして、自分や友達のよさを認め合いながら、共に高まっていく集団をつくった。ワークシートへの記入により、書くことを通して自分の思いを表現するとともに、友達のよさを認め合うことのできる学級づくりができた。

〈小学校〉

２　道徳の授業後、使用した挿絵や子どものワークシートを教室に掲示することで、お互いの思いを知り合い、学級の中で困っていたら助け合う姿等が見られるようになった。また、その内容を学級通信で知らせることで保護者の理解も得られ、家庭でも道徳の授業のことや友達、先生、地域の方との関わり等について話題になるようになった。〈小学校〉

３　道徳の授業風景や授業後の生徒の感想、掃除など普段の学校生活での取組を適宜、学級通信や道徳通信に掲載し、道徳の授業の大切さや目的を家庭や地域に伝えた。それに対して、感想を返信してくれる保護者や地域の方もおり、道徳教育について教員・生徒・家庭・地域社会が一緒になって考える場面が多くなった。

　また、「心のノート」や副読本の文を学級の現状に合わせて掲載した。それを楽しみにしてくれる保護者もいた。〈中学校〉

４　道徳アンケートから、各学年の生徒の心情に関する内容（「人の役に立つ人間になりたい」、「学級活動では、互いに信頼して話し合い、励まし合って、よりよい学校生活をつくろうとしている」、「いじめはどんなことがあってもいけないことだと思う」など）をピックアップし、結果を棒グラフにまとめて道徳通信に掲載し発行した。今後は、学級・学校内での掲示内容なども考え、発信の仕方をより工夫していくことによって、家庭・地域社会と一体となった道徳教育を推進していこうと考えている。〈中学校〉

（７）学級経営と教育課程　ウ　学級経営と総合的な学習の時間　　ｐ１４

１　グループ学習をする時、一人一人の役割分担ができるよう準備した。それぞれが責任をもって取り組んでいく過程での努力や、教科の時間には見えない子どもの姿やよさを発見し、評価を子どもに伝えていった。また、協力して各自の役割を達成し、責任を果たす経験を重ねさせることで、自己有用感や自尊感情の育成につながるとともに、学級の集団の高まりにつながった。〈小学校〉

２　教科の時間には苦手意識のある子どもが、総合的な学習の時間にリーダーとして活躍できる場面を設定した。活動中も子どもが自信をもてるような評価を行い、前よりも努力していることや、うまくいっていることなどについて、教員が肯定的な評価を返すことやほめることにより、子どもの自尊感情を育むことにつなげた。また、活動を通じての感想を出し合い、子ども同士で評価し合う場面を大切にすることで、体験を通したつながりができた。〈中学校〉

（７）学級経営と教育課程　エ　学級経営と特別活動　　ｐ１５・ｐ１６

１　学級活動の「（２）日常の生活や学習への適応及び健康安全」の「（ウ）望ましい人間関係の形成」の授業において、学級の子どもが日常の生活と関連付けながら、集団での話合いを通してみんなでより仲良くできるように、役割や責任、個人の目標を自己決定し、人間関係づくりの活動を計画した。その後、特設の時間に、一人一芸の課題や班でのクイズ、縄跳び、ダンス、寸劇等、司会者が評価を入れながら進行した。終わりの感想の場面では、一人一人の努力や日頃見られないところを認め合う声も聞かれた。〈小学校〉

２　学校行事の「（３）　健康安全・体育的行事」での運動会（並び方、綱引き）、「（４）　遠足・集団宿泊的行事」で遠足（動物ウォークラリー）についての取組を１・２年生の合同で実施した。活動を通して、１年生は自分達が来年度の１年生にこんなことをしてあげようという意欲が生まれ、２年生の中でリーダーになることが難しい子どもも、１年生には優しい声がけをし、活動に対して意欲をもって動けるようになった。〈小学校〉

３　出身小学校別に班を編成し、出身小学校のトイレ掃除を行った。トイレ掃除そのものには、子どもの謙虚な気持ちや、相手を思いやる気持ちを育てるなど、多くの「気付き」や「学び」が期待でき、併せて、同じトイレを掃除する者同士には、強い仲間意識をもたせる効果もある。出身小学校に対して、お礼の気持ちを込めながら行うトイレ掃除では、小学生や小学校の先生から受けた感謝の言葉が、子どもの「自尊感情」を育むことにつながった。〈中学校〉

４　学級活動の「（１）学級や学校の生活づくり」の「ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決」の授業において、「期末テストに向かって、私たちの朝学習がどうすればよくなるのか、考えよう。」を議題として班や学級全体での話合いをもった。事前に行ったアンケート結果をもとに、朝学習の取組に否定的な仲間の存在や、仲間同士での教え合いが円滑にできていないことなどを事実として確認した。そして、「仲間のために自分ができること」や「仲間に望むこと」に加えて、「仲間への批判」や「見下した行為」はしないなど、人権的な視点も含めて話合いを深めた。さらに、学級で向上するための目標と具体的な行動を決定し、その後の朝学習に反映させることができた。〈中学校〉

５　学級活動の「（３）学業と進路」の「エ　望ましい勤労観・職業観の形成」の授業において、地域人材（調理師兼経営者）を講師として活用した。講師への礼状を書くことを設定したことで、社会で生きる自分自身の決意について思考し表現することができた。一見料理の世界とは関係なく思われる掃除を何年もしてきたことなど、講師の料亭での修行時代の話や包丁を用いた実演、子どもの講師への質疑応答から、子ども自身が、学校での学習や日常生活を振り返り、仕事の厳しさとやりがい、夢や志に向かって目標をもつことの大切さなどを実感し、事後の生活（掃除や係活動など）に生かせるものとなった。〈中学校〉

（８）学級経営と生徒指導　　ｐ１７・ｐ１８

１　子どもが問題行動を起こした時は、別室に呼び指導を行っているが、子どもの行為を責める前になぜそのようなことをしたのか、今どのように考えているのかについて問いかけ、子どもに答えさせたうえで、やった行為の非や問題性について、「先生は～と考えている」とアイ・メッセージで指導を行った。そうすることによって、子どもは自分の行為を先生は許してくれないが、気持ちを理解してくれていると感じたのか、いろいろと話しかけてくれるようになり、問題行動も少しずつ減少していった。〈小学校〉

２　自己決定を大切にしたいと考え、班行動において班長に権限をもたせ班の自治を促進した。毎週班長会を行い、班の課題を共有するとともに、課題解決に向けて班長として、どのような取組をしたらよいのかについてみんなの意見を出し合い、その中で自分がやっていこうと考えるものを選択させて取り組ませた。そのことを通して、班長としての自覚が芽生えるとともに、班長同士の協力や信頼の雰囲気が高まっていった。〈中学校〉

３　学級内の共感的な雰囲気を構築するために、特別活動における学級活動の時間を活用した話合い活動において、付箋を使ったブレーンストーミングからＫＪ法へと展開した。展開に際して、批判しない、人の話は最後まで聞く等のルールを確認して行うことで、協力や信頼の雰囲気を醸成することにつながった。〈中学校〉

（９）学級経営とキャリア教育　　ｐ１９～ｐ２１

１　自校の課題について全教職員で共通理解を図り、キャリア教育の視点を取り入れた学級経営や学年経営を行うことで、授業が改善し学力も向上した。〈小学校〉

２　キャリア教育を中核に位置付けた校内研修を行った結果、学習指導要領の内容を踏まえた基礎的・基本的な内容の充実が図られ、教員の目的意識も高揚した。〈小学校〉

３　異世代・同世代と学び合う体験活動を充実し、教科や道徳の時間・特別活動との内容関連と系統性を見直した結果、学校組織の活性化を図ることができ、子どもの学習意欲の向上にもつながった。〈小学校〉

４　学級担任だけでなく学年単位で研修の時間をとり、指導計画の見直しを図ることで、学習内容と将来の生活を関連付けた指導を行った。〈小学校〉

５　年間を通して、地域の職業人を学校に招き、仕事への理解を深めるため「仕事に関する講話」や「実習指導」等の取組に関わってもらった。〈中学校〉

６　地域と学校が互いに連携を図りながらキャリア教育に取り組み、地域ぐるみで子どもたちの社会的・職業的自立に必要な能力等の育成を図ったことにより、取組がより豊かで深みのあるものになった。また、地域の方々との交流や共同作業を通して、豊かな人間関係を築く能力を育成できた。〈中学校〉

７　学区内の小学校と中学校の連携を生かした、９年間を見通した一貫性のある指導と支援の在り方を追求した。〈中学校〉

（１０）学級経営と進路指導　　ｐ２２

１　ワークシートに好きなこと（教科、スポーツ、趣味など）や興味をもっていること、苦手なこと、将来の夢などを記入し、それをもとに生徒との面談を昼休みや放課後に行った。子どもの思いに寄り添いながら、得意なことを伸ばすための工夫や、苦手なことにチャレンジする方法、悩みについての解決方法なども伝えてきた。定期的に面談を行うことで、子どもとの人間関係もより確かなものになった。〈中学校〉

２　「10 年後の自分」宛てに手紙を書くことで、将来への具体的なイメージや夢に向けての課程（努力方法や期間など）を考えさせた。その後、クラスの中で自分の夢についてスピーチを行った。お互いが大事にしていることを伝え合える人間関係をつくることを意識し、取り組んだことで、夢に向けて共にがんばろう、仲間を応援しようという雰囲気や関係ができた。〈中学校〉

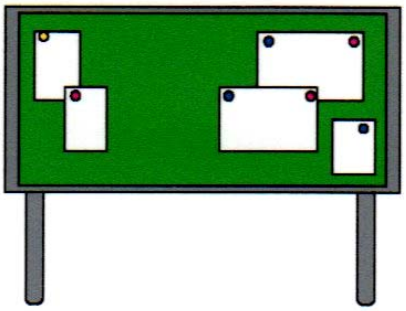
３　来校者への挨拶や、職員室への出入り・礼の仕方、丁寧な言葉遣いを日常から子どもに意識させるとともに、将来の社会生活における礼儀作法の大切さを繰り返し伝えてきた。〈中学校〉

４　「将来の目標」「その高等学校に行きたい理由」「将来の夢」を考えていく中で、どのような生き方をしたいのかしっかり考えさせていった。安易に「行ける学校」への受験ではなく、「行きたい学校」への受験に向けて、学習や生活においての指導やカウンセリングを行ってきた。〈中学校〉

５　高校生（卒業生）に制服姿で中学校に来てもらい、進路についての全校での聞き取り学習を行った。高校生から、進路決定に至るまでの悩んだこと、勉強方法など、後輩へのメッセージを伝えてもらった。また、中学生から質問をすることで、進路についての意識がより強くなった。〈中学校〉

６　高等学校の教員に学校に来てもらい、コース別に分かれて説明会を行い、子どもが興味をもった高等学校の情報を得ることができるようにした。参加対象を３年の子ども・保護者だけでなく、他の学年の保護者も参加できるようにし、早くから進路に対する意識を家族と形成することができた。また、説明会後にグループで子ども同士が感想を出し合い、進路に向けての意識を高めることができた。〈中学校〉

７　１年生から高校入試への面接練習も兼ねた面接を行った。１２月から帰りの会で進路についての話をし、生徒に現時点での中学卒業後の進路を考えさせた。３学期の放課後には、2～3 人ずつ面接練習を行った。引き戸の開閉方法や礼の仕方、椅子の座り方、目線、話し方などの練習も含めて行うことで、入試への緊張感も体験することができた。練習では、「卒業後の進路」、「進路に向けて必要だと思うこと」、「将来の目標」、「この１年間で自分が努力してきたこと」、「自分の長所と短所」、「学級活動や生徒会活動で取り組んできたこと」、「ボランティア活動や部活動」、「友達関係」などについて質問し、子どもの思いや考えを聞いた。子どもの進路に対する意識も芽生え、有効な取組となった。〈中学校〉



【実践編　子ども】に関連する実践事例

（１）年間を通した学級づくり　　ｐ２３～ｐ３０

１　計画性をもって授業や生活と向き合った。子どもが見通しをもてるように、夏休みまでのカウントダウン等を行った。〈小学校〉

２　集団の一員として、最上級生として目指す自分の姿を明確にもたせるため、学校が目指す姿と、担任としてどのように成長して巣立ってほしいかを伝え、「目指す自分の姿」を目標という形で示させた。学習意欲、自立的な委員会活動、全校における縦割り班での活動の際にも、自分が掲げた目標を意識することで、目標をもって失敗を恐れずに取り組む姿が見られるようになった。〈小学校〉

３　学級開きの日に担任から子どもへの思いを話し、その思いをその後の学習活動全般の中で、さまざまな場面に対応させながら、学級または班といった集団を意識させた。

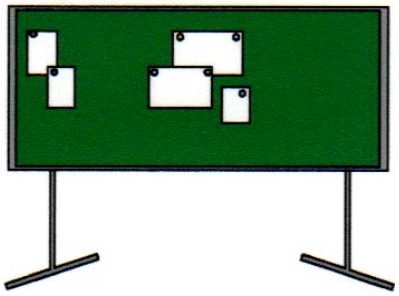
〈小学校〉

４　毎日テーマを与え、それについて３０字以上の文章を生活日誌に書かせた。時には、その内容を通信で紹介した。子どもの思いや考えはもちろん、友達関係の把握もでき、学級経営上の参考となった。〈中学校〉

５　夏休み中に登校日を設定し、全ての宿題をやりきるまで登校を促し、２学期をスッキリした状態で迎えさせた。また、生活のリズムを学校モードに変えることができた。

〈中学校〉

６　年度当初の１週間で学級のルールを徹底し、自分たちで行動できる基盤をつくった。前日の放課後、黒板に提出物等の出し方や活動内容を板書しておくと、登校した子どもは朝の会までに指示通りに活動した。毎日繰り返し、できたことを評価することで、学級のルールが定着した。〈中学校〉



（２）学級における一日の生活　　ｐ３１～ｐ３５

１　４月の新年度が始まってすぐに、学級の子どもから好きな色、食べ物、遊び、教科や将来の夢や希望等アンケートをとっておいた。このアンケートを使って誰のことなのかを考え、当てる活動をした。アンケートの内容がヒントになっているので、内容を分けて使うと１人につき、何回か出題することができる。朝の会・帰りの会等の短い時間で活用した。〈小学校〉

２　帰りの会の時間に「今日のキラキラ」というコーナーを設定し、友達の頑張りやよかった行動、学級のみんなで頑張った活動などを取り上げ、お互いに評価し合った。そして、学級のみんなで頑張ったことを星型の色画用紙に書き、教室に掲示した。学級の仲間意識が高まり、一つになって取り組もうとする姿が多くなった。〈小学校〉

３　子どもと担任と保護者の三者で共有すると効果が大きいので、ミニ日記を毎日行った。発言しにくい子どもも日記になら書けることもあるので、悩みも発見でき、うれしいこともすぐに発見できることがあった。〈小学校〉

４　自分の言葉、行動、心が「笑顔の花」につながることを意識して生活できるように、朝（帰り）の会で行動目標を設定し、評価を行った。全員の「笑顔の花」は、ビー玉貯金としてクラスで貯めていき、みんなの励みとした。ビー玉が貯まったら、みんなでお楽しみ会を行った。〈小学校〉

５　帰りの会では、一日の反省点よりも、班の誰がどんな場面で頑張っていたかなど、「よかったこと」を振り返らせて発表させた。また、その日に「一番輝いた人」を「日直班」から発表してもらった。このことにより、友達の「よいところ」を意識する学級集団づくりが進んだ。〈中学校〉

６　朝の会、帰りの会では、学級担任からの伝達はなるだけ短時間で終わるように意識し、学級全体にしっかりと聴かせたい話がある時は、昼食の時間を活用して伝達することで、内容の定着化を図ることができた。〈中学校〉

７　全員の名前と空欄を記入した用紙を準備し、ホームで配付して自分以外のメンバーのよいところを書いたら次の人に回していった。最後に、担任が回収し短冊形に切り取って、本人に渡すことで、肯定的な気持ちをもたせるようにした。〈高校〉

８　帰りのショートホームルームで一日２～３人を割り当て、前でスピーチをさせた。それぞれが本を持って来て、その本の魅力やなぜその本が好きになったのか、また読書後の自分の変化等を自由に話させることで、本への知的好奇心を高めることにつなげた。〈高校〉

９　その日が誕生日の子どもの名前をホームで言い、小さなカードを全員に配ってバースデーカードを作ることで、子ども同士の関係性を高めていった。〈高校〉

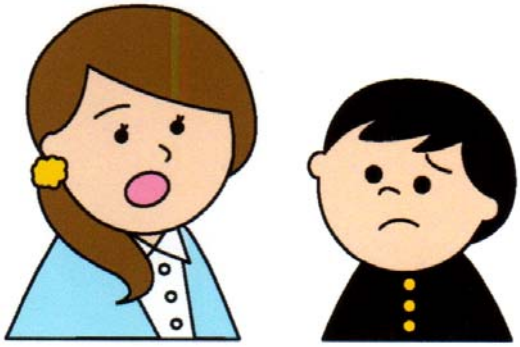
（３）問題等が発生した時の対応　　ｐ３６・ｐ３７

１　欠席した子どもへのお見舞いの手紙シートを作成した。欠席した子どもに、「みんなあなたのことを思っているよ」という気持ちを伝え、クラスの子どもには教室にいない子どもへの思いやりを忘れさせない指導として行った。欠席した子どもだけではなく、保護者ともつながることができた。〈小学校〉

２　クラスで問題が起きた場合、どのように子どもに返していくのかを考える必要があることから、（１）その時に　（２）その日の帰りの会で　（３）次の日　（４）機会（チャンス時に）が大切と考えた。

　子どもへの対応の仕方はいろいろ考えられるが、どの方法が最善であるかを、瞬時に判断して対応していった。その時に職場に相談できる仲間がいることも大きな力となった。同じ思いの仲間の存在、相談してみようという関係の仲間をつくっておくことの大切さを感じた。〈中学校〉

３　「いじめ」や「嫌がらせ」につながる行為があった時には、課題解決の方向とゴールは、子どもの中から生み出せる「子どもが本来もっている正義感」を信じることが重要であると考えて取り組んだ。学級担任は、子どもと一緒に課題解決の方向とゴールについて考え、子どもの気付きをつなぎ合わせる役割を果たした。〈中学校〉



【実践編　保護者】に関連する実践事例

（1）学級通信の工夫と留意点　　ｐ３８～ｐ４０

1　子どもを５班に分け、１週間に１回自分の書いた記事が載るよう、５cm×５cm 位の紙に書かせて貼り合わせて、子どもたちが作成する学級通信を発行した。子どもも楽しみにし、家庭での会話や参観日での大人と子どもとの会話が増えた。名前も子どもが考え、学校での生活を家庭に知らせるので「出前新聞！」とした。〈小学校〉

2　保護者との情報交換として、学級通信（返信欄）を活用し、子どもの様子や保護者の意見をもらった。保護者の返信を学級通信で紹介することで、保護者間の意思疎通を図った。〈小学校〉

3　どんな些細なことでも、昨日より頑張っていること・できたことを見逃さずに、個人、グループ、学級全体などそれぞれの活動や状況に応じて、授業中、朝の会や帰りの会、学級通信等で伝えていった。〈中学校〉

4　保護者との良好な関係を築くため、子どもの様子や学校行事等の写真を交えながら学級通信を毎日発行した。初めは毎日配られると読むのが面倒臭いと批判的な生徒もいたが、数か月過ぎると、通信を楽しみにしてくれるようになった。保護者から「子どもの表情や学校の取組がわかる」「子どもとの会話のネタが増えた」と評判であった。〈高校〉

5　楽しいホームをつくることができたらという思いから、副担任の時には「副担任通信」を発行した。４コマ漫画や短歌を取り入れ、年度末には学級通信上で最優秀賞を発表した。１年後には、ささやかな「青春の歌集」を作成した。このような取組を通して、国語の力が十分でない子どもも、だんだんよい作品を生み出すようになった。〈高校〉

6　ホーム通信で偏りなく子どもの名前が出るように配慮した。主任・副主任だけでなく、他の職員、保護者、企業人などのコメントをできるだけ手書きで掲載した。〈高校〉

（2）保護者との関係づくり　　ｐ４１～ｐ４５

1　子どもが学校生活で頑張りを見せた時に、帰宅時にその子の家を訪問し、保護者に子どもの頑張りを伝えるようにした。「今日、〇〇さんがすごく頑張ったので直接伝えたくてちょっと寄らせていただきました」と言って、子どもや家族に訪問の意図を伝えることが、よりよい関係づくりにつながった。〈小学校〉

2　指導が必要なことや気になることだけでなく、生活の中でよかった点を見付け、連絡することで保護者とのつながりを深めた。〈中学校〉

3　連携を深めるため、生徒の様子などを日常的に電話等で連絡し合った。指導が必要なことや気になることだけでなく、生活の中でよい点を連絡してきた。〈中学校〉

4　配慮を要する子どもや心配な子どもを中心に、家庭訪問や電話連絡を行い保護者との関係を密にした。〈高校〉

5　地域、保護者との関係が疎遠な定時制高校だからこそ、家庭訪問・職場訪問を年に１度は実施し、保護者との信頼関係を構築した。〈高校〉

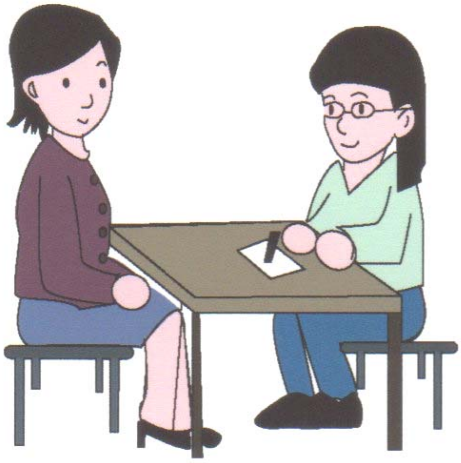
（３）保護者や地域からの苦情・意見への対応　　ｐ４６

１　保護者からの学校批判等に対して、相手の話を遮ることなく、誠意をもってよく聴くことで、保護者の感情も和らぎ、落ち着きを取り戻すことができた。

　また、話の中心を、子どもの成長のためにどうしたらよいかを考える方向に導くことで、前向きな話合いにすることができた。〈小学校〉

２　感情が高ぶっている状態の方（地域の方）に対しては、複数の教員で対応するようにした。落ち着いて話せる場所で話を聴き、相手の思いを共感的に受け止めるとともに、お茶を出し、丁寧な言葉で話すことを意識した。

　また、学校が改善すべき点について説明し、学校だけではできないことについては、協力してもらうことで理解を求めることができた。〈中学校〉



参考文献等
＊「一人一人が輝く確かな学級経営を目指して」　釧路教育研究センター研究紀要第１７５号
＊「平成２４年度　『研修のしおり　子どもと生きる』」　高知県教育センター
＊「Ｑ－Ｕ入門」　河村茂雄　図書文化
＊「温かい学級づくりのために」リーフレット　高知県心の教育センター
＊「人権が尊重された学校づくりのためのチェックリスト（学習指導）」
http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310801/gakkodukurityekkurisuto.html
＊「学級集団づくりのゼロ段階」　河村茂雄　図書文化
＊「教師のためのカウンセリングワークショップ」　菅野　純　金子書房
＊「不登校チェックリスト」　高知県心の教育センター
＊「『脱いじめ』への処方箋」　嶋﨑政男　ぎょうせい
＊「いのちを守り育むために」　高知県教育委員会
＊「優れた教師の省察力」　久我直人　ふくろう出版
＊「発達障害の子どもとあったかクラスづくり」　松久眞実　明治図書

監　　修　久我直人　鳴門教育大学教授
　　松久眞実　プール学院大学講師
全体調整担当　高知県教育委員会事務局　教育政策課
企画編集担当　高知県教育委員会事務局　人権教育課
執 筆 担 当　高知県教育委員会事務局　小中学校課
　　高知県教育委員会事務局　高等学校課
　　高知県教育委員会事務局　特別支援教育課
　　高知県教育センター
　　高知県心の教育センター
作 成 協 力　東部教育事務所・中部教育事務所・西部教育事務所
イ ラ ス ト　基本編・実践編　　高知大学教育学部芸術文化コース　吉岡ゼミ
　　矢野聡珠・南　静香・飯田ゆき・鶴見さくら・
　　碓香菜子・杉原　絢・井上芽衣・張雅茹・戴伊審
　　表紙・裏表紙・中扉　川﨑敬子

※本ハンドブックの作成にあたって、アンケート調査や実践事例提供等、多くの教員に協力していただきました。

学級経営ハンドブック
「夢」・「志」を育む学級づくり（中学校編）

平成２５年３月作成
編集・発行　高知県教育委員会

〒７８０－０８５０　高知市丸ノ内１－７－５２
Tel　０８８－８２１－４７６５（人権教育課）

名前	